
天音の世界

森沢みなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天音の世界

【Nコード】

N9100V

【作者名】

森沢みなぎ

【あらすじ】

五月女縁が家の近くの湖で見かけたのは学校でも美人と噂の時和天音だった。そしてその時から縁と天音の奇妙な関係が始まる。

湖のほとり（前書き）

この小説を読んでおかしいと思ったことがあつたら感想に書いてもらえると思います。内容、文章、誤字脱字なんでもかまいません。

湖のほとり

時和天音。

彼女の存在を知ったのは高校入学してすぐのことだった。まだ出来たばかりの友人たちとヤマアラシのジレンマで距離感を掴んでいて、踏み入った話ができない時期には学校内の話題が多い。その中の一つで『時和天音』の話が出た。眉目秀麗、容姿端麗、才色兼備と友人はその時和を褒めに褒めちぎっていた。俺はソイツの言うことを話半分に聞いていた。どうせ、話を盛っているのだろうと。しかし、その考えも時和と廊下ですれ違ったことで誤りだったと気付く。

腰まで届くしなやかで艶のある黒髪、白くて一点の染みもない肌、整った顔立ちに黒を基調としたセーラー服を着こなす少女。その姿は何処か戦後失われた古風な大和撫子を思わせる。

なるほど、これは周りが色めき立つわけだ。

しかしその後、特に時和との接点もなく、こちらからアプローチを掛けようとも思わない。

時和は高根の花なのだ。高すぎて底辺を生きている俺には手が届かない。お近づきになりたくないと言えば嘘になるが、だが断崖絶壁を登るという苦行をしてまで、お近づきになろうとは思わない。

だからこれからも時和と俺の人生が交わることはないだろう。そう思っていた。

だけど、それは五月十四日のちょうど始り、夜中の十二時に大きく変わることになる。

市販の納豆が入ったコンビニのビニール袋を片手に帰路についていた。辺りに街灯はなく真っ暗で、さらに木々が風に靡く音は気味が悪い。そこら辺の茂みから幽霊でも出そうな雰囲気だ。

そもそもなぜこんな夜中に納豆を買いに行く羽目になったかという、一緒に住んでいる祖父に原因がある。俺の祖父、じいちゃん

は無類の納豆好きだ。それも三食とオヤツに食べるくらい大好きだ。しかし、今日、正確には昨日、学校帰りに納豆を買い忘れ、一時間前によく忘れたことに気付いたのだ。仕方なく、明日は我慢してもらおうとじいちゃんに告げると――

「今はほらコンビニとかあるだろ。そこでちよつと買つてこい」
なんて言い出した。

じいちゃんの家はこの町の森や畑が多い田舎の地域にある。つまり、近くのコンビニに行くのも一苦勞なのだ。これが都会に住んでれば歩いて三分とかだろうが、こっちでは歩いて二十分だ。往復で四十分。正直言つて勘弁してほしい。

だが、喰わせてもらっている身分でそんなことを言えるはずもなく、渋々買いに出たというわけだ。

まだコンビニを出て五分も経つていない。つまり後十五分は歩くと、思うと憂鬱になる。しかもさらに俺には明日提出の課題もあるのだ。学生によくありがちな、まだ夜は長いから大丈夫だろうなんて考えてたらこの様だ。憂鬱どころか帰りたくなる。

そんなことを考えていると、それは見えた。

この町に唯一ある湖。名前は確か時和湖だ。それほど大きくもなく小さくもない湖でよくこら辺に住んでいる鹿が水を飲みにくるのでちよつと有名な場所だ。

とはいっても高校の登下校で見飽きている。いまさらそれを見てどうこう言うつもりはないのだが、今日はすこし違つた。

湖に一人の女性がいたのだ。

湖畔にではない。

湖の中心に女性がいたのだ。

何度も目を擦り、確認した。間違いなく、湖の上に立つてる人がいる。水に沈むことなく、重力に反発して立っている。

だが、まだそれは些細なことだ。別に俺の人生の中でなんの変わり映えもしない出来事と言つてもいい。しかし、その立っている人物が俺を驚かせた。

月光に照らされ、輝く湖の上に立ち、花が鮮やかに描かれた着物に身を包み、その長い袖と腰まである黒い髪は夜風に舞う。そしてなのよりその悲しげな表情が、その姿を一枚の絵のように仕上げていた。

人であるなら男女問わず一目で心を奪われそうな、

妖美で、

儚げな、

時和天音はそこにいた。

学校の屋上

「なあ、時和ってどんな奴だ？」

その問いに篠崎はペンを走らせる手を止めた。そしてまるで未確認生物を見るような目で見てきた。

「どうしたんだ、五月女。お前が人間に興味を持つなんて珍しいじゃない」

言葉に語弊がある。それだと俺が人に無関心で冷たい人に聞こえるぞ。

決してそんなことはない——はずだ。

「まあでも、五月女も男だからな。時和さんを知りたいって気持ち
はわかる」

うんうん、と篠崎は何度も頷く。

別にそういう恋愛感情や卑しい気持ちで聞いたわけではないのだが、否定しても篠崎は聞く耳をもたないだろう。

一人で勝手に納得して、一人で勝手に突っ走る奴だから。

「それでどんな奴だ」

篠崎に任せていたらいつこうに話が進まないの、再度質問する。

「一言で言えば美人だ」

それは見ればわかる。

「それ以外だ」

「眉目秀麗、容姿端麗、才色兼備」

前言ったこととまるっきり同じことを言ってるし、しかも美人って意味が含まれてるのもある。

進歩という言葉を知らないのかコイツは。

「後、もう一つ。謎が多い」

それは初耳だ。

「謎ってのは具体的にどんなのだ」

「彼女のプライベートなことは誰も知らないんだよ。家族とか、住

んでる場所とか。なんでも担当の教師も知らないらしい」

プライベートとは範囲が広い。

しかし、教師が知らないとはありえるのか。普通なら本人に訊いたりするだろう。

「なんでもこの高校の理事長の口利きしてるって噂だ。彼女が本気になれば生徒一人退学にできるって噂もある」

そんな生徒がいたら怖くて学校生活が送れない。

だがなるほど、理事長の口利きがあればプライベートを隠すことも可能か。するとますます怪しくなってきた。

時和天音。

彼女はいつたい何者なんだ。

昨晚、湖で見かけた女。格好は着物だったが、あれは確かに時和だった。しかし、その時の彼女はとも人間に見えなかった。湖の上に立っていたこともそうだが、あの姿には人間に出せない妖美さがあつた。

俺には彼女が人間だと思えない。

「まあ、時和さんにはいろんな噂が流れてるけど、今一番話題になつてるのが、」

篠崎は勿体ぶるように間を作る。

それだけの驚きの噂なのだろう。もしかしたら彼女が何者なのか、核心を突いたものなのかもしれない。真実よりも噂の方が、人を知るうえでは核心を突いたりするのだ。

「彼女は彼氏持ちって噂だ」

一番どうでもいい噂だった。

その後は「二年の先輩が男と一緒に歩いているのを見たらしい」だの、「親密そうな関係だったらしい」だのと騒ぐ篠崎を無視して教室を出た。もともと今日提出予定だった宿題をやらずに放課後残された篠崎に付き合わされたのだ。これ以上付き合う義理もない。

校庭では野球の威勢のいい声が聞こえるが、学校内は人気が少ない。昇降口へと下りたところで数名の生徒たちがいた。手には画材

道具のようなものを持っている。どうやら全員美術部員のようだ。

彼らに紛れて靴に履き替えようと下駄箱を開いた。その時、見覚えのないものが入っていることに気付く。

それは一枚の便箋だった。

最初は手紙と思ったが、便箋を二つ折りにしただけのものを手紙と呼ぶのはお粗末だ。メモと呼ぶのが妥当だろう。

そして重要なのが便箋の内容だが、なんと綺麗で達筆な字で『屋上で待ってます』とだけ書かれていた。

ベタだ。ベタ過ぎて怪しさまで感じさせる。

まあ、愛の告白やら、ラブレターという選はこの手紙と言えないメモを見た時点で捨てた。残るは悪戯という選だが、これを入れたのが放課後になってすぐなら、すでに犯人は屋上で待ちかねて帰っているだろう。だから、この選も考えなくていい。そしてもう一つ、俺に話がある選。しかも、便箋まで使って呼び出すんだから、人前では言えないような話だし、今も待っているかもしれない。これが一番、可能性がある。

溜息を吐く。

面倒事は本当に勘弁してもらいたい、行かないと後々さらに面倒になる気がする。

渋々屋上へと向かう。

実際体験してわかったことだが、一階にある下駄箱に『屋上で待ってる』なんて手紙（俺の場合はメモ）を入れるなんてただの嫌がらせだ。

そんな愚痴っぽいことを思っているうちに屋上に到着。さっさと終わらせて帰ろう。躊躇なく屋上へと出る。

「遅いっ！」

出迎えたのは大音量の怒声。

待ち構えたのは鬼のような顔をした時和天音だった。

まあ、予想は出来てた。このタイミングで俺に話があるやつは時和しかない。

「女の子が待つてゐるって言ってるのにいつまで待たせるの！ それでも貴方男の子！」

意外だ。時和天音はこんな風に声を荒げて怒るようなやつじゃないと思っていた。人は見かけによらないというのは本当だったらしい。

「それは悪かった。友達と話しててメモに気付いたのが今さっきだったんだ」

「言い訳は聞きたくないわ
いや、事実だ。」

それに非が全部こつちあるわけでもない。メモを下駄箱にいれるなんて古臭い方法で呼び付けるからこういうことになるんだ。

まあ、そんなこと言ってもまた言い訳として処理されるから言わない。

「本当に悪かった。今度から気をつける」

そう言いながらも内心は「もう次がありませんように」と真剣に祈っている。

そこまで言つてようやく時和は怒りを鎮めた。そして真剣な眼差いで俺を見る顔は、俺の知ってる時和の顔にだった。

「それで俺をここまで呼び出した理由はなんだ。まさか愛の告白つてわけじゃないんだろ」

さっさと用事をすませて帰りたい。

「それは貴方が一番わかっているでしょ。昨日のことよ。身に覚えにないなんていわせないわ」

やはり昨日のことだろう。俺が時和だと気付いたように、時和も俺だと気付いていたのだ。

「身に覚えにない」

とりあえず一回は否定しておく。鎌かけだったら嫌だから。すると時和は鋭い眼光で俺を睨んだ。美人の睨みは迫力があるし、かなり怖い。

「嘘は吐かない方がいいわ。そうじゃないと貴方、殺されるわよ」

「なに言つて——」

るんだ、と言いかけて止めた。いや、後ろに表れた人影に驚かされて止められた。

さっきまで気配も感じなかったのに、今、俺の後ろ、息もかかるような距離に誰かがいる。

「選ばせてあげる。白を切つて死ぬか、正直に話して生きるか」

そう言つてニコツと微笑む。

背筋が凍った。悪魔だ。ここに悪魔がいる。

こちら辺が潮時だ。といっても本当はここまで粘る気はなかった。展開が急すぎて寿命が縮みそうだ。

「……わ、悪かった。話すから殺すのだけは勘弁」

「それじゃあ話してもらうわよ」

そう言つて時和は悪魔の笑みを浮かべる。

俺は昨日のことを洗い浚い喋った。と言つてもただ納豆を買つた帰りに見たと詳しく説明した。

「そうやっぱり貴方は私たちのことが“見える”のね。昨日の私は人間には見ることができないはずなの。なのに貴方はしっかりと私を見てた」

一通り話し終えると時和はそう切り出した。

「……………」

「正直に言つて。そうしないと」

と時和は俺に後ろに視線を向ける。

そこにはまだ人の気配がある。

思わず溜息を吐いた。

「そつだ。俺は“見える”よ。人には見えない妖怪とか、アヤカシとか、昨日のお前も俺には見える」

「そつ、これですつきりしたわ。脅すようなやり方をしてごめんなさい」

時和の言葉で後ろにある気配が消えた。

糸の切れた操り人形のように体の力が抜ける。背中と両手は冷や

汗でびつちよりだ。

そして再び時和に視線を向けると、そこには黒いスーツの男が立っていた。

いつの間に。

そう思つて男を観察していると額に小さな角がある。

「ソイツ、もしかして鬼か？」

「意識的に見えてなくしたのも見えるのね。」

まずは自己紹介するわ。私は時和天音。あの時和湖の化身よ」

「化身？」

「ええ、人は私のことを九十九神とか、土地神とか呼ぶわ」

九十九神は古くからある物や土地に心が宿するというやつで、土地神はその土地を守護する神だと聞いたことがある。

「それはつまりお前は時和湖自身であそこを守ってる神ってことか？」

「そうよ。理解が速くて助かるわ」

これまで妖怪やアヤカシなんかは腐るほど見てきたが、神様を見たのは初めてだ。しかも同じ高校の同級生なんて、神様がそんな人間に染まっかけていいのか。

「それでこつちが百目鬼。貴方が言った通り額に角のある鬼よ。私のボディーガードなんかしてくれてるの」

そこで初めてその百目鬼とかいう鬼と目が合った。

どこかで見たことある顔だ。

「あ、もしかしてこの学校の理事長か」

確か学校新聞なんかで見たことある。

「あら、よく気付いたわね」

ここの理事長は若くて寡黙だと一部の女子生徒に人気があると、篠崎から聞いたのだ。

しかし、その理事長が人間じゃなく鬼で、しかも神様のボディーガードだったとは思わなかった。

「最後に一つお願いというより、忠告をしておくわ」

となんとも友好的な笑みを浮かべて、

「もしこのことを誰かに言ったら今度こそ百目鬼が後ろからやるわ」
なんとも恐ろしいことを言い放った。

「肝に銘じておく」

そう言つと時和は満足そうに頷く。

「それじゃあ私は訊くことは聞いたから帰るわ。来てくれてありがとう。それじゃあまた明日」

「ああ、また明日」

そう言つと時和は屋上から去り、理事長はいつの間にか消えていた。そして屋上には俺だけが残される。

この時、俺は時和が言った「また明日」が社交辞令だと思つていた。

便箋は宴会への招待状

翌日。時和から呼び出されたからといって特に学校生活が変わることはなく、普通の授業、普通の昼休み、普通の放課後を過して帰ろうと下駄箱を開けた。

「……マジか」

思わず一人呟いてしまった。今日はホームルームを終えて直ぐに来たので周りには人が多い。その中で出た独り言はなんとも恥しいモノがある。

俺は下駄箱にあった“ソレ”を手にとってトイレへと駆けこんだ。個室に入って鍵をしっかりとける。

そしてソレ、昨日と変わらない便箋で、昨日と変わらない二つ折り、昨日と変わらないお粗末なメモ用紙を開いた。

『時和湖で待ってます』

昨日と変わらない綺麗な字でそう書かれていた。

絶句した。俺の中では昨日のことで時和とは完全に縁が切れていると思っていたが、あっちはそう思ってたらしい。

しかも今回は時和湖に呼び出し、つまり自分の縄張り（？）に呼び出しされた。

なんだ。やっぱり見てはいけないものを見たのか。だから、食べてしまおうという算段か。

頭の中で思考がぐるぐると駆け廻る。

だんだんと面倒臭くなってやめた。それに食べるなら昨日食べているだろう。

とりあえず、呼び出しに応じて帰りに時和湖によることにした。

帰路の途中、コンビニが目に映った。

時和湖は言わば時和の住まいのようなものだ。そこに行くのに何も持っていないというのもおかしい。

コンビニで適当に菓子類とジュース類を籠にいれて会計をすませ

た。

そんなこんなで時和湖についたのは五時ごろだった。そして湖畔に近づいた時、そこにある光景に唖然とした。

そこには妖怪やアヤカシで埋め尽くされ、宴会状態となっていた。

「遅い！」

湖畔に足を踏み入れた俺を前にも聞いたことのある怒声が迎えた。

「まったく縁くんどこで油を売ってたの？」

俺の名前を読んだのは時和だった。一昨日と同じ着物姿だが、柄が違った。うつすらと青い夏をイメージさせる着物だ。

「おい、これはどういうことだ」

「見てわからないの？ 宴会よ、宴会。この時和湖は週に一回はこうして仲間を集めて宴会をするの。でもいつもいつも食べて飲んでだけじゃつまらないから、少し刺激がほしいなって思ってた」

その刺激が俺か。何か場違いなところに来てしまった感じがする。そんな俺の気持などお構いなしに時和は手を叩いて、注目をこちらに集めた。

「はいはい。みんな注目しなさい。これが昨日話した私たちが見える人間の五月女縁くんよ」

そう告げると妖怪どもが騒ぎだした。

「ほほお、これが例の。意外とヒョロい奴だな」

「なにを言う人間は全員ヒョロいではないか」

「しかし、我々が見えるとはまた稀有な奴じゃな」

「おい人間。見えているか、ワシらが見えているか」

と妖怪たちは俺の周りに群がり腕や足、頬などを触りだし、仕舞いには髪の毛をひっぱりだした。

コイツらは遠慮というものを知らないのか。

「ほらほら、みんな止めなさい。縁くんは今日が宴会デビューなんだからもつと優しくしなさい」

「はーいーい」

何処の幼稚園だ、ここは！

妖怪たちは時和の言うことを聞いて、俺の傍から離れていく。

「ごめんなさい。みんなには私からキツク言い聞かせておくから」

と代わりに謝りますみたいなのを言ってるが、こうなった元凶はお前だということを自覚してもらいたい。

だが、助けてもらったことは事実なのでお礼ぐらい言っべきだろうと、隣を向くとそこに時和の姿はなかった。

「縁くん、これはなにかしら」

声の方を向くと、時和は俺が持っているビニール袋に興味津々で座って見つめていた。

そこでお土産があることを思い出した。もしかしたら俺の判断は正しかったのかもしれない。宴会には食べ物も飲み物も必要だ。

「コンビニで買ってきたお菓子和ジュースだ。まあ、差し入れみたいなものだ」

と言って時和にビニール袋ごと手渡した。

時和はさっそくビニール袋の中を物色し始めた。そして一つひとつを物珍しそうに見つめる。

「そんなにお菓子が珍しいか。時和はこっちで生活してるんだから食べたことあるだろう」

「クラスの子たちが食べてるのは見たことあるわ。でも、食べたことはないの。ほら、私は神様だから食べるってことしないで生きてもいいじゃない。それに学校生活以外はこっちで生活してるからこういう物にはあまり縁がないのよ。それにお金とか持ってないのよね」

確かにここで神様がコンビニで買い物しているところは想像できない。とうとうか金がなくても生活ができるから、買い物なんて一度もしたことないのだろう。

「その点は流石、縁くんね」

「何がだ」

「名前の通り縁を運んできてくれるわ」

私上手いこと言った、と言わんばかりに胸を張る。

前言撤回。

こんな人間臭い神様なら想像できる。

そして時和は一つずつお菓子を食べ始めた。目新しいものに妖怪たちが寄ってくるが、「全部私のよ！」と言って分けてさえもらえない。

俺は少し隅っこの方でビニールからこっそり抜いたお茶を飲む。

するといつの間にか黒いスーツの鬼、百目鬼が俺の横にいた。

「なにを固まっている」

初めて声を聞いた。

「いや、昨日もそうだったけど、理事長突然表れますね」

「ここでは百目鬼でいい。敬語もいらない」

「そうか」

とそこで会話が途切れる。なんとも居心地の悪い雰囲気だ。

何か話題を求めて視線を泳がせると時和が目に映った。お菓子をばくばく食べている。すると、横からきた妖怪にポテトチップスの袋を奪われて怒った。

「ここでの天音はそんなに珍しいか」

意外にも百目鬼の方から話かけてきた。

「ああ、俺の中での時和は清楚なお嬢様みたいなイメージだったからな。ここでの時和はなんていうか子供っぽい」

「それはそうだろう。天音は未だに学校で人間とどう接しているのかわからずにいるのだ」

それは初耳だ。俺が初めて廊下ですれ違った時は何人かの女子生徒と一緒にいたが。

「自分の正体を知られることが怖いのだろう。だから深く交友を持てないでいる」

「なら百目鬼が教えてあげればいい。アンタだって人間の世界で生活してきたんだろう」

「私ではダメだ。私は人間の世界で生きて行くことを決めたが、人間と交友を深めようとはしなかった」

それでよく人間の社会に馴染めたな。

「しかし天音は違う。人間と仲良くなるうとしている。だからお前に頼みたいのだ」

「頼むって何を？」

「学校での天音をだ」

「はあ？」

「出来れば天音が友達を作れるように協力してほしい」

思わず間抜けな声が出してしまった。

「まってくれ、なんで俺なんだ」

「お前は私たちが見えるから既に天音の正体も知ってる。天音にとつては心許せる唯一の人間なのだ。お前が率先して天音と接してくれば友人も多くできるだろう」

できるだろうって決めつけるのかよ。

「悪いが俺はそんな役立つ人間じゃないぞ。俺自身、友達少ないし」

「それは知っている」

「なんで！」

「だが、いないよりマシだ」

「それにかなり過小評価だ！」

「ということ宜しく頼む」

この鬼は人に頼むときの態度つてものを知らない。

百目鬼は言いたいことを言い終わると、突如として姿を消した。

ホント神出鬼没なやつだ。神様の時和より謎めいてる。

天音の遊びは危ない

百目鬼が俺に傍からいなくなると時和が「やっと話し終わったよ
うね」と言って近づいてきた。どうやら話し終わるまで待つという
常識は持ち合わせているらしい。

「縁くん、野球拳するわよ」

一瞬思考が停止した。まさか、神様の口からそんな言葉がでると
は思わなかった。

「おい、そんなゲーム何処で知ったんだ」

「友達に教えてもらったの」

百目鬼、どうやら時和にはちゃんとそういうくだらない話ができ
る友達がいるようだ。

「一度やってみたいと思っていたの。やりましょ」

「なに言ってるんだ。するわけないだろ」

「なに、負けるのが怖いのか？ 大丈夫よ。神様は器が広いからハン
デをあげる。私が一回負けるたびに二枚脱いであげるわ」

「それでもやらない」

「無理しなくていいのよ。縁くんぐらいの歳の人間は異性の裸に興
味津津なんですよ。私は神様だから見られても平気よ。やったわ、
縁くん大チャンス」

神様と人間とでは感じる羞恥心が違うらしい。まあ人間と神様を
比べるのはおこがましいことだ。

けど、そこら辺は人間と一緒にでもよかった。

「だからやらないって言ってるだろ」

そういうと時和は頬を膨らませて不満を表現する。

子供だ……。

「なによ、男のくせに怖がっちゃって。そんなんがら学校で冷血漢
なんて呼ばれてるのよ」

「おい待て。俺はそんな呼び名初めて聞いたぞ」

女子の間ではそんな呼ばれ方しているのか、俺。

「あらそうなの」

と言って特にその話題について語らず身を翻した。

くそつ、なんで俄かに不安になるようなことを言い残すんだ。

五分後。

「縁くん、この前友達から教えてもらったんだけど、このトッポ―
っていうお菓子でやるゲームで」

そう言って時和は長細いクッキーの上にチョコレート付けたお菓
子を見せてきた。

「こつ男女で端と端を食べ進めて、お互いの唇を当てるんだですつ
て。ねえ、やってみない？」

誰だそんなことを時和に教えたバカは。

「あのなあ、人間はそういうことを軽々しくやらないんだよ」

「あら、でも私は神様よ。そんなこと気にしないわ」
なら人間の遊びも気にしないでもらいたい。

「俺は気にするんだよ」

「そんなこと言わずに、人間の世界でも言うでしょ。毒を食らわば
皿までつて」

「おい、それ自分で面倒事を押しつけてるって自覚してないか」

「間違えたわ」

どんな間違えた。

「据え膳と鰯汁を食わぬは男の内ではない」

「やつぱり間違えたままでいいです！」

「そうやってくれるのね」

「今俺、そんなこと一言でも言ったか？」

コイツの脳内はどうなってるんだ。

「とにかく俺はそんなことしない。他を当ててくれ」

断られると不服そうな顔する。

「おかしいわね。この手の話題に男は喜んで喰いついてくるって友
達言ってたのに」

おい誰かそのバカ呼んで来い。

さらに五分後。

「縁くん、王様ゲームやりましょ」

「他を当たれ」

またくだらないことになるのは目に見えてるので、さつさと断る。
「大丈夫よ。今度は縁くんが嫌がらないように命令が予め決められてるやつ持ってきたから」

と言って時和は本格的な王様ゲームの用意をもってきた。

「これどうしたんだ」

「うん？ 友達に借りたのよ」

なんとなくわかってはいた。しかし、命令が予め決まっているなら、今までの中では一番健全そうな遊びだ。

「わかった。それくらいならやる」

「ホント、やったわ。じゃあさつそく」

時和はクジを引こうとする。

「待て。二人で王様ゲームはできないだろう」

「そうなの？ 友達は二人でやった方がいって言うってたわよ」

「そんなわけあるか。おいお前らちよつと混ざれ」

近くで酒を飲んでいた三人の妖怪を呼びつける。

当然のことなら妖怪たちが王様ゲームのルールを知るわけもないので、時和が説明する。

「それじゃあ初めるわよ」

「「王様だあーれだ」」

「あら、私だわ」

時和が赤い印のクジを高らかに上げる。

「じゃあ、さつそく」

命令が書いてあるクジが入った箱に手をつ突つ込む。

「これでいきましょう。えーと、『王様の隣の人が隣の人にキスをする』」

なに？

「ワシが？」

筋肉質の妖怪と、

「俺か？」

太った妖怪が呟いた。

「じゃさっそくキスしてもらえる」

「きすつてなんだ？」

「あれだろう。接吻のことだ」

「ああ、あれか」

と二人の妖怪は躊躇わずキスをした。

思わず目を反らせてしまった。妖怪とかは本当にそう言ったことに抵抗がない。

それよりも問題なのが、命令の内容だ。なんでいきなりそんなギリギリのが出てくるんだ。

一抹の不安を覚えながらも王様ゲームは続けられた。

「じゃあ次いきましよう」

「王様だーれだ」

「あら、また私」

なんて引き運が強いんだ。神様ってのはいろいろと便利だ。

「これなんかよさそうね。『王様の目の前の人が隣の人の胸を揉む』」

「はあ？」

「ワシだな」

とよぼよぼの妖怪。

「って俺か」

と俺。

「じゃさっそく揉んでくれる」

妖怪が俺の胸に手を当てて揉んだ——と思っただけで思った通りに来た。

「イテエッ！」

コイツ見かけによらず力が強い。抓られたところを摩る。内出血してないよな。

「なあ時和、ちょっとその箱貸せ」

「いいわよ」

時和から命令が入った箱を受け取り、数枚のクジを確認する。

「……………」

言葉も出なかった。どうやら俺の不安は杞憂にはなってくれなかったようだ。

俺が引いたクジは『うなじにキス』だとか、『王様を後ろから強く抱きしめる』だとか、残りはとも口には出していけない内容だった。

しかもこの命令、二人でもできる内容が多い。

なるほどだから二人でやった方がいいなんて言ったのか、その力は。

「なあ、もう王様ゲーム止めないか？」

「あら、どうして？」

「いやほら、なんかそれほど面白くないだろ」

時和は考え込むような体勢を見せて頷いた。

「そうね。命令もよくわからないのが多し、ここら辺で終わりにしましょう」

時和は王様ゲームの道具を持って去って行った。

さらにさらに五分後。

「縁くん、友達からもらったんだけどこのツイスターゲームっていう――」

「もうほんと勘弁してください！」

限界だ。もう俺はついていけない。

湖畔の隅へと逃げ込む。木に背を預けて、そのままずると座り込む。

「おい、百目鬼いるんだろ」

「なんだ」

木々の間からずっと百目鬼が出てくる。

「俺には無理だ。時和と一緒にいるだけで疲れるのに友達作りに協

力できるわけがない。

だいたい気の許せる友達を作るってそんな簡単なことじゃないだろ。普通は長い時間かけてお互いを知って作るもんだろ」

作った経験はないけど。

「そんな悠長なことは言ってられないんだ」

百目鬼が初めて表情を見せた。怒りや憎しみ、負の感情が籠った表情だ。

そして何より悲しんでいるようにも見えた。

だが、次の瞬間にはまたいつもの無表情に戻る。

「それよりお前はそれでいいのか？」

「いいって何が？」

「お前はこういった宴会のような賑やかなことが苦手なのだろう。

だから天音と接していると疲労を感じる。アイツは親しい奴には特に接してくるからな」

親しい奴って昨日ちゃんと知り合ったばかりだぞ。

「お前はそんなんだから、友達が少ないんじゃないのか？」

正論で事実だ。

俺は人と騒ぐのは好きじゃない。その原因はこの目にある。

幼いころから妖怪やアヤカシが見えた俺はよくその存在を他人に見せようとした。自分だけ変な者が見えることが怖かったのだ。結界的にそれで気味悪がられたり、嘔吐き呼ばわりされた。そんなんだから昔から友達と呼べる奴はいなかったし、俺自身作ることを諦めていた。そんな生活が嫌で高校入学と同時に俺のことを知らないこの町に来たのだ。

だけでももう遅かった。対人恐怖症とっては大げさだが、人を避けるようになっていたのだ。たぶん、昔みたいに誰かが俺のことを蔑んで離れていくのが怖いんだ。小さい頃の思い出がトラウマになっている。

その点では時和と同じかもしれない。アイツは自分の正体を知られて友達が離れていくのが怖い。俺は自分が嘔吐きと呼ばれて人が

離れていくのが怖い。怖いモノは同じだ。

けど、時和と俺とでは大きく違うところがある。俺は怖くて立ち止まっているが、時和は怖くても立ち向かっているところだ。俺は今でも人から避けている。友人と呼べる奴が篠崎しかいないのがその証拠だ。それに比べて時和は自ら進んで人間の世界に飛び込んで、学校にまで通っている。

百目鬼の言う通りこんなだから友達が少ないんだ。

もつとよく時和を見習うべきなんだ。

でも、そんなことを言うのは負けた気がするので、

「大きなお世話だ」

虚勢を張っておく。

「そんなんだらかお前は冷血漢なんて呼ばれるんだ」

「……俺、本当にそう呼ばれてんの？」

というかなぜ理事長が知っている。

天音は世界を楽しむ

宴会は日が暮れても続けられ、夜の八時を回ったあたりでお開きとなった。その間、俺はずっと時和は振り回されて、運動会の後の疲労感のようなものが肩にどっしりとのしかかる。

妖怪たちは森の中へと消えていき、残ったのは俺と時和と何処かにいるであろう百目鬼の三人だ。

「今日は来てくれてありがとう。おかげで楽しかったわ」
「俺は疲れたよ」

そう言っただきく背伸びをする。これから帰って英語と数学の予習しなくちゃいけない。高校生っていうのは面倒だ。

それに好き好んで入っている時和は本当に凄いななんて思っている
と時和がこちらを覗き込むようにして見ていた。

「もしかしてこういうの迷惑？」

と不安そうな顔をして上目遣いで訊いてきた。

普段の俺なら躊躇なく、「迷惑だった」と言うから冷血漢なんて呼ばれるんだろう。

だが、今日の俺は百目鬼に指摘され、自分でも意識しているから、
言い留まった。

こういう時はどういすべきだろう。

『凄い楽しかったよ』

『そうならまた呼んでいいわね』

却下だ。こんなことを毎回やってたら体が壊れそうだ。

『あんまり誘わないでくれ』

『そう。そんなこと言うから冷血漢なのよ』

オブラートに包んだところで言ってることは変わらないので却下。

『偶にはいいかもしれない』

『偶につてことは週に一回くらいはいいわよね』

向こうの感覚で決めつけられそうなので却下。

「あー、月に一回ぐらいならこういうのも悪くないと思う」

とりあえず、ちゃんとした意思表示をして気を使うことにした。

「そう、ならよかったわ」

時和は心の底からほっとしたように胸を撫で下ろした。

「なあ、どうして時和は人間の世界にきたんだ。別にここでも楽しくやっていけるだろ」

宴会の様子を見ていれば、時和がここでも十分楽しくやっているのはわかる。ここに不満を持っていそうにも思えない。それなのにどうして人間の世界まで来て友達を作ろうとしているのか。

それがどうも気になった。

「そうね……もつとこの世を楽しみたいからかしら。

ここでの生活も楽しいわ。みんな飲んで騒いで、人間の世界にある柵なんて一つもないわ。でも、人間の世界はそこじゃないと得られない楽しさっていうものがあるの。柵があるからこそ生まれる楽しさっていうものがあるわ。」

私はその両方ほしいの。ここでの楽しみも、人間の世界での楽しみも両方ほしい。だってそうじゃないともったいないじゃない。せっかくこの世に生を受けたんだから、欲張って、欲張って楽しいこと全部やりつくしたいと思うのが当然でしょ」

時和は歩き出し、湖畔と湖の境界に立つ。

「それに私は神様だから寿命もないし、老いもない。長い時間があるから二つの世界を行き来できるしね」

時和は境界を飛び越えて湖側へと行く。一昨日と同じように重力に反発して水の上に浮いている。その姿だけが時和が神様なのだと確認できる。

そして時和はクルリと回転し、にっこりと笑う。

「こんな風にね」

その顔は本当にこの世を楽しんでいる人の顔だ。

俺には到底できないな。

「でも、縁くんと会って、人間の世界が楽しくないんじゃないかつ

て不安になつたわ」

と急に声のトーンを落とす。

「俺が何かしたか？」

「ぜんぜん楽しそうに生きてない。笑わないし、友達いないし、顔が怖いし、融通利かないし、捻くれてるし、天の邪鬼だし」

「おい、だんだんと俺の悪口になつてゐるぞ」

「いうかどうして会つたばかりの奴にそんなことを言われたいといけないんだ。」

「冷血漢だし」

「ほつといってくれ！」

コイツ神様のくせに人の傷を抉ってくる。

「まるで世捨て人ね。世の中が嫌で隠居して遠くから傍観するだけの人」

なんだ。ここは俺の公開処刑場か？

そんなことを考えていたから、次の一言は完全に不意打ちとなつた。

「でも、私は貴方と出会えてよかったわ」

歩いていたら後ろからトラックに轢かれたぐらいの衝撃的だった。なぜか時和の目を見られなくなる。不自然なくらいに視線を外した。

まさか俺が恥しがってる。いや俺はそんな奴じゃないだろ。何事にも動じないような奴だ。それが女子にあんなこと言われて恥しがるような奴じゃない。そうだ。俺は女子に冷血漢なんて呼ばれてる男だぞ。無表情、無関心が俺のポリシーみたいなものだっただろ。

心を落ち着かせようと何度も深呼吸を繰り返していると、時和が言葉を続けた。

「だってこうやってお菓子をもってきてくれたし」

一瞬で心が落ち着いた。

というか、気持ちが氷点下まで下がった。

深い意味を期待した自分が恥しかったが、それよりもなによりも目の前で、アレが美味しかった、コレをもう一度食べたいと騒いでいる神様に怒りを覚えた。

「おい、時和はちよつとこつち来い」

手招きすると時和はこのこやつてきた。

そして時和の脳天にげんこつしてやった。

その後数日間、時和は俺を呼び出すようなことはしなかった。ただ単に用事がないだけだと思ったが、この前廊下ですれ違った時にあからさまに視線を反らされた。

どうやらげんこつをしたことを怒っているようだった。

最初のうちは俺も自業自得だと思っていたが、今冷静に考えてみると俺はなんであそこまで怒ったんだと思うようになった。傍から見れば、ただこつちが勘違いして、勝手に怒っただけじゃないか。

つまり全面的に俺が悪いわけだ。

「なあ五月女。お前時和さんに何かしたのか？」

昼休み。俺が時和のことを考えていると、篠崎がやってきた。そしてまさに俺が今悩んでいることを聞いてきた。

「なんでそんなこと訊くんだ？」

「今、学校中の噂だぜ。五月女が時和さんを怒らせたって」

どうやら噂の原因は廊下での出来事だろう。

「で、どうなんだ。本当なのか？」

「まあ概ね」

「マジか！」

声大きい。教室中の注目の的だ。

「声を抑えろ」

「お前、いつ知り合っただんだ？」

「最近だ」

篠崎は「道理で時和さんのことを熱心に訊いてくるわけだ」となぜか悔しがっているように見えた。

「それでお前何したんだ。あのお淑やかな時和さんを怒らせたんだ。よっぽどことしたんだろ」

お淑やかという部分で思わず笑いそうになったが抑えた。やっぱり学校だとそういう印象なんだろう。

「まあいろいろだよ」

「そのいろいろが気になるんだろ」

篠崎だけには時和の頭にげんこつをしたなんて言えない。次の日には壮大な尾鰭がついていることだろう。そしたら俺は確実に学校で肩身の狭い思いする。

「まあ言いたくならいなら聞かないけど。でも五月女、少し気をつけた方がいいぞ。お前は特に学校内での評判悪いから」

「冷血漢か……」

そう呟くと篠崎は驚いた顔をする。

「なんだ知ってたのか。やっぱり流石の五月女でも自分の噂くらい気にするよな」

知ったには人伝えで数日前だけだな。

「だいたいお前、人と接しなさすぎるんだよ。自分から話しかけようとしないうし、話しかけても受け答えが「ああ」の一通り。誰だつて勘違いするって」

やっぱりそういうのから直していった方がいいのか。でも、今更俺が積極的に話しかけたり、愛想よく受け答えしても手遅れな気がする。

「その点俺はお前の良さはしっかりとわかってるぞ」とサムアップする。

俺の良さ。今後のために訊いておきたい。

「なあ、俺の良さってなんだ」

「宿題写させてくれるところと放課後一緒に残ってくれるところ」

篠崎には遠慮なく脳天にげんこつをしてやった。

しかし、篠崎の言うことは正しい。自分から話しかけなければ関係は生まれないし、コミュニケーションを取することもできない。つまり、時和が俺を無視している今、自分から話しかけなければ仲直りもできないわけだ。

流石にこのままっていうのは目覚めが悪いし、学校での居心地も悪い。

問題は手段だ。普通に時和のクラスに行って、時和を呼び出して謝ればいいのだが、これには大きなリスクがある。

それは時和が呼び出しに応じなかった時のことだ。時和が俺に怒っていることを教室中に知れ渡らせることになる。そうすれば今以上の噂が流れることは間違いない。

ハイリスクなくせにローリターンだ。

ということで、もっとリスクの低い手段を選ばないといけない。

だが俺はこういう仲直りのための手段というものに乏しい。今まで一方的なイジメはあっても、ケンカをしたことはなかったからだ。

時和に謝ることができて、拒否されない方法。

一つだけ思い当たるのがあった。

けどこれは――

「やりたくねえな」

許す代償は高い

翌日の早朝。いつもより一時間も早く学校に登校した。

そして下駄箱の前。下駄箱の名前の欄には『時和天音』と書かれていた。

そして俺の手には一枚の便箋。

経験者は語る。手紙を下駄箱に入ればかならず内容が気になって読む。

その内容は『殴って悪かった』の一言。他に何を書いていいのかわからなかった。

そして便箋には名前は書かなかった。読まれる前に捨てられるのを防ぐためだ。その代わり便箋を二つ折りにする手紙というにはお粗末なメモという時和独自の方法を真似した。これは俺しか知らないはずだから、受け取った時和は俺だと気付くはずだ。だが、確かな確証がないから本当に俺からの手紙なのか心配になって読むという戦法。

それはいいとしてもやっぱり他人の下駄箱に手紙（今回の場合はメモ）を入れるのは恥しい。告白とかそういう意味でないと自分でもわかってるはずなのに、頻りに辺りに人がいないか確認してしまう。

しかしそんなことで手間取っていたら生徒が登校して来てしまう。意を決して時和の下駄箱を開けて便箋を入れた。

その瞬間、即座にその場から退避。

なぜか早歩きになっている自分が恥しかった。

その後、そつが無く進む授業もあまり頭に入ってこない。あの便箋のことが気になって集中できない。気を抜くと、ちゃんと受け取ったのか、ちゃんと読まれたかなど詮無いことを考えてしまう。

たぶんラブレターを下駄箱に入れた奴の気持ちはこんな感じだろう。

俺は全然そういう意味じゃないけどな。

「ってなに自分に言い聞かせてるんだ……」

時和に出会ってからどうもおかしい。自分が自分じゃないみたいだ。やっぱり時和の性格が調子を狂わせているのか、それとも時和に感化されているのか。

時和を見て俺は慌てているのかもしれない。自分もあんな風になりたい、自分も変わりたいと。無意識にそんなことを思って、行動しているから。意識が付いていない。だから自分がわからない。柄にもないことしたり、思ったり。

今ここは岐路なのかもしれない。

自分を変える兆候になるか、それともただの時和への憧れになるか。

俺にとってこれはチャンスかもしれない。

そして便箋への返事は昼休みに起きた。

「五月女くん、こ、これ、時和さんから……」

クラスメイトの女子が恐る恐るといった様子で俺に一枚の便箋を渡してきた。

それは時和はいつも使っている便箋。

受け取ろうと手を伸ばしたところで篠崎が言っていたことを思い出す。

「……あ、ありが、とう……」

「え、う、うん。どういたしまして？」

便箋を受け取ると、女子は信じられないものを見たような目で俺を一回見て去って行った。

どうして疑問形になる。そんなに俺がお礼を言うのがおかしいのか。

自分の日ごろの行いに不安を覚えながら、いつものように二つ折りになった便箋を開く。

そこには大きな文字で『遅い！』と書かれていた。

「……ひでえな」

これは謝るのが遅いという意味だ。しかしこれでは許してくれたのか、それともさらに怒らせたのかわからない。いや、謝ってくるのを待ってたということは、許す気があるということか。

いったいどう受け取っていいのかわからないでいると、便箋の最後の方に小さく何か書いてある。

『許してほしければ放課後、商店街の西口に来るように』

商店街に呼び出し。何か買いたい物でもあるのか。しかし金を持つてない、と宴会の時に言っていた。

「つまりは俺を財布代わりにしよう」と

思わず溜息を吐いてしまった。

これで許してはもらえるのだろう。だが、目覚めと居心地の悪さの代わりに面倒事が押し寄せてきたようだ。

とりあえず便箋をしまう。こんなものを篠崎の奴に見られたら大変なことになる。

「おい、五月女」

と思つてたところにちょうど篠崎が来た。まさに噂をすれば影がさす。

「なんだ」

「今さっき教室のドアのところでお前のこと話してた女子がいてな」
たぶん便箋を渡しに来た奴だろう。

「お前が冷血じゃなくて気持ち悪いって言ってたぞ」
なら俺はいつたいどうすればいいだ。

放課後になり俺は予定通り商店街の西口へと向かった。

気持ち的にはライオンに会いに行くシマウマだ。どうして食べられるのがわかっていて会いにいかなくてはならないんだ。

「縁くん、遅いわよ」

西口にはすでに時和の姿があつた。時和湖の時の和服とは違い、高校の制服姿だ。

「いやお前が早すぎるんだ。俺はホームルームが終わってすぐ来たんだぞ。お前、いつたい何でここまで来たんだ？」

「縁くん、私が神様だつて時々わすれてない？ 人と同じようにしか移動できないと思われてるなんて心外だわ」

「なら俺がくるたびに遅いとかいうなよ。俺は真人間だぞ」

「なに言ってるの。私たちが見える人が真人間なわけないでしょ」
確かに。時和にしては珍しく正論だ。

「それに今日の縁くんは私に口答えができるの？」

それを言われると厳しい。というか、今日一日俺は時和に逆らえないのか。

「悪かった。もう何も言わない。」

それで今日は何処に行くんだ。商店街ってことは何処かで買い物するんだろ」

「縁くんの察しがいいところ私、好き」

俺はお前の図々しいところが嫌い。

なんて言ったらまた「口答えするな」なんて言われるだろう。

「でも買い物というより、買い食いなだけどね」

「買い食い？ 何か食べたい物でもあるのか？」

「ええ、ここから近いお店にあるパフェが食べたいの」

と言つて時和が案内したのは歩いて一分もしないところにある喫茶店だった。

「いらつしゃいませ」

入店を知らせるベルがなると、営業スマイルを浮かべた店員がやつてくる。

「お客様何名様ですか？」

「え、え、ええとその」と店員に問われてしどろもどろになる時和。

「二人です」

「二名様ですね。喫煙席と禁煙席どちらがよろしいですか」

「きんえんせき？ きつえんせき？」と言葉の意味が分からない時和。

「禁煙席で」

「はい、奥の空いてる席にどうぞ」

と促されるが前にいる時和が動こうとしない。

「おい、早く行け」

「え、あ、うん」

やっと動いたと思ったたらなぜキョロキョロと挙動不審だ。しかも奥へきてもなかなか座ろうとしない。

「さっさと座れ」

「え、でも何処にすわればいいの？」

「何処でもいいんだよ」

そう言ってようやく目の前の席に座った。しかし、挙動不審なのは直らず、窓の外を見たり、他の席を見たりと忙しい。

「おい、少し落ち着いたらどうだ」

「え、うん」

と頷きじつとするが、目は泳いだままだ。そんな時和をジッと見つめていると目が合った。

時和は気恥しそうに照れたように笑った。

「実は私、こういう場所来るの初めてなの。だから物珍しくて。いつも遠目からは見てただけど」

「見ればわかる。それに時和ならしょうがないだろ」

とフォローするが、なぜか時和は不満そうな顔をする。

「わかってたならもう少し優しくしてくれてもいいんじゃない？」

「なに言っただ。優しく教えてあげただろ」

「え！」

時和は心底驚いた顔をする。

「あれでよく優しくしたって言えるわね」

「教えてやったんだ。優しいだろ」

すると今度は信じられないものを見たような顔をする。

コロコロと表情が変わる奴だ。

「教えたから優しいというわけじゃないわ。教えるのは当たり前なの」

「冷血な人間は教えてもくれないだろ」

そうだからさっきの俺は冷血漢じゃない。

「それは人の血が通ってないだけよ。さっきの貴方は十分に冷血な人だったわ」

「……………」

俺の優しさは優しさじゃないらしい。だから、冷血漢なんて呼ばれるのか。つまり根本的に間違ってたわけだ。

真実を知って落胆していると時和が溜息を吐いた。

「昔はそんな子じゃなかったのに。もっと素直で、愛想があつて。人って本当に時と共に変わってしまうのね」

「おい、俺とお前が知り合ったのは最近だろ。なに昔を思い出したようにしょぼりしてんだ」

本当にこの神様は本当に神様なのか。

水に浮く以外神様らしいところを見たことがない。

「とりあえず注文するぞ。頼むものは決まってるんだろ」

「ええ、大丈夫よ。まかせて今度こそ堂々とするわ」

なんたつて神様ですから、と言って胸を張る。

「すいません、注文いいですか」

近くを通りかかった店員を呼び止める。

「はい、ご注文どうぞ」

「え、ええと、ぐ、ぐらんでばふえください」

「グランデパフォですね」

噛んでるしニュアンスもおかしい。しかもまた目が泳いでる何処か堂々としてるんだ。

と思つていると店員がこちらを見ていることに気付く。

時和に気を取られて注文するのを忘れた。

「えっと、紅茶を一つ」

「申し訳ございません。当店は紅茶はメニューにないんです。コーヒーならございますよ」

「コーヒーか……」。

視線をメニューに向ける。

「じゃあ、メロンソーダで」

「メロンソーダですね、かしこまりました。ご注文は以上でよろしいですか？」

俺が頷くと「少々お待ちください」と店員が去って行く。

「あれがお前の堂々とか？」

厭味と皮肉をたっぷりと込めて呟いた。

瞬間、時和の顔はムツとなる。

「昔っから苦くてコーヒーの飲めない縁くんには言われたくないわ。子供のころよくコーヒーなんて苦くて飲めないなんて騒いでいたわね」

「確かに俺は苦いのが苦手でコーヒーが飲めない。だけどお前と知り合ったのは最近だ。いつまでそのネタ引つ張るんだ」

「それに縁くん、もう忘れてない。今日どうしてここにいるのか」
思わず舌打ちしそうになった。

「縁くんには私をぶつた罪があるのよ。謝罪の誠意を見せなさい。本当なら神様らしく神罰を与えるところなんだけど、私は寛大だからそれだけは勘弁してあげたの。謝罪だけじゃなくて感謝もしてもらいたいところだわ。それともこの手紙書いてある内容は嘘だったってことかしら？」

そう言って時和は一枚の便箋をひけらかす様にひらひらと靡かせる。

「おい、なんで持ってたんだ！」

「なんでって、これは私宛に私の下駄箱に入っていた私の手紙よ。私が持っていて当然でしょ」

「そうだけど、ここで出すな！　しまえ！」

「あら、縁くん、私にそんなこと言っているのかしら」

「ううっ……」

コイツ、今日は徹底的にそれを盾にする気だ。

「悪かった。もう厭味も皮肉も言わない。それでいいだろ」

「あら、それだと今日、縁くん喋れないわね」

「どういう意味だ！」

俺そんなに嫌な奴だったのか。

だから冷血漢なんて呼ばれてるのか。

そんな問答をしていると、注文の品がやってきた。

「こちらメロンソーダになります」

と言って俺の前に置かれた。そのまま店員が去っていくのを見るとまだパフェは出来ていないようだ。

パフェって作るのに時間がかかるのか、と思っていたら店員が戻ってきた。

両手で巨大なパフェを持って。

「こ、こちらグランデパフェになります。ご注文は以上でよろしいですか？」

「……………」

店員の言葉が耳に入らなかった。目の前にある巨大なパフェに目を奪われてしまったからだ。

俺は今までテレビなんかでデカ盛りパフェとかそういうものの紹介を見てきた。だが、これは規模が違う。俺と時和を挟むようにパフェを置くと、時和が見えなくなる。視界の一面、フルーツとアイスクリームで埋め尽くされる。俺のメロンソーダと比べると、まるでアリとゾウだ。

「あ、あの、これ」

「グランデパフェです」

と営業スマイル。

「食べきった人いますか？」

当然の疑問をぶつける。

「いますよ」

「いるんですか！」

「七人がかりですけど」

ですよねえ！。

「これ、頼んで作り始めたんですか？」

「いえこちらのパフェは完全予約制です」

バツと時和に視線を向けた。だが、すでにパフェに心を奪われたようで、夢中で食べていた。

この世間知らずは、どうして店に一度も入ったことがないくせに予約なんてできるんだよ。

とりあえず存在は認めよう。このパフェはここにあつて、今、時和に食べられている。

問題は値段だ。これほどの物がいったいいくらになるのか、相場を知らない。

恐る恐るメニューを見る。

グランデパフェ……………一万円（一時間以内に一人で食べきったらタダ）

店員に目を向けた。その手にはストップウォッチ。

食べ切れ、時和！

心の中で絶叫する。ここで食べ切らなかつたら、俺たちは完全に無銭飲食だ。予約したくせに金を用意してないって完全に相手を虚飯にしてる。この歳で前科持ちは嫌だ。

だが、落ち着いて考えてみる。これは本当に一人で食べ切れる量なのか。このメニューに書いてあることもただの客引きにすぎないのではないか。

考えれば考えるほどマイナスな方へと行ってしまう。というかこんな細い体にこんな巨大なパフェが入るわけない。

俺は店員に土下座でもなんでもして、とりあえず家に金を取りに行くとした。いや、今食べている時和を置いて今取りに行った方がいいのか。

時和に一度家に戻っていいか聞こうと顔をあげた。

あれ？　なんか結構パフェ減ってないか？

半分とまではいかないものの、三分の一ぐらいパフェが減っている。おかげで時和の目が見えるようになった。

「今何分ですか？」

「十七分です」

その時間でこれだけの量を食べたのか。
俺が見ていない間になにがあっただ。

ジツと時和が食べる様子を観察する。

一口一口はその小さい口に合わせてるから少ない。だが、ペースが速い。一回も休まずにフルーツとアイスクリームを口に運んでいく。パフェはそれに合わせてどんどん減っていく。

店員に残り時間を訊こうとして驚いた。

気付けば店の客が全員にこっちの席に視線を向けていた。

まあこれだけのパフェを食べ続ける女子なんてそうはいないからな。しかも食べてるのが美人の時和だからな。

そして時和は一回も手を止めることなく、休むことなく、最後の一口を食べた。

店に静寂が生まれた。

「四十三分二十三秒で完食です」

店員の声と共に歓声が上がった。

「すげー、食べ切った」

「誰だよ、あの子。めっちゃ可愛いじゃん」

「ここのグランデパフェ、大食いタレントが挑戦しても失敗したんでしょ。すごい」

「神だ。ここに神がいる」

時和を褒め称える声が店中に響く。

当の本人は「え、なに、どうしたの？」と客たちが騒いでいるのかわからないでいた。

「お前に感心してるんだよ。何か反応してやれ」

俺がそう言うとき和は歓声を上げる客たちに頭を下げた。

しばらくすると店の奥から店長らしき人がでてきた。

「いやー、まさか一人で食べ切る方が出てくるとは思いませんでした。ぜひ、記念撮影をお願いします。完食した方として飾りたいので」

「はい。いいですよ」

時和は客に歓声を浴びて、気分がいいのか快く頷いた。
店の奥から店長がカメラを持ってくる。

「ほら、縁くんも一緒に映るのよ」

「え！」

時和がとんでもないことを言ってきた。

「いや食べ切ったのは時和だろ。ならお前だけが映ればいいだろ」

「なに言ってるの。縁くんがいなかったら、ここに来ることもなかったのよ。このパフェも食べ切ることにはなかったわ」

「だけどな……」

と渋っていると客からヤジが飛んできた。

「なに恥しがってんだよ、彼氏」

彼氏じゃない、と否定する前にどんどん声がかかる。

「そうだ。そんなに嫌なら俺と代われ」

「羨ましすぎるぞ」

もう完全に一緒に写真を撮らなくちゃいけない雰囲気になった。
嫌々フレームインする。

するとなぜか時和が俺の腕にしがみ付いてきた。

「おい何してんだ！」

「え、友達が男と写真撮るときはこうした方がいいって」
だからそのバカ早くここに呼んで来い。

「撮りますよ」

「いや、まだ待て。今ダメだ！」

「はい、チーズ」

俺の制止も虚しく、シャッターは切られた。

天音は人間の世界の初心者

その帰り道、時和は二枚撮ったうちの最初の一枚を記念として貰い、その写真を見つめて嬉しそうにしている。

そこには満面の笑みの時和と慌てふためく俺が映し出されていた。「なあその写真捨てないか？」

「ダメよ」

即答だった。

「こんなによく撮れてるのに何が不満なの？」

「いやよく撮れてないだろ。俺、かなり慌ててるし」

「それがいいんじゃない」

「おい、やっぱり捨てろ」

コイツこの写真使って何しでかすかわかったもんじゃない。

「ダメって言うてるのが聞こえないの。そうね、じゃあこの写真で私の頭ぶったこと許してあげるわ」

最後の最後にそれを盾にしてきた。

こうなったら諦めるしかない。

「それにしても今日は楽しかったわ。パフェも美味しかったし」

そうだ。俺は一番訊きたかったことを訊いていない。

「お前よくあのパフェ全部食べられたな。何か神様の力使ったのか」

「確かにあれは私みたいな神様じゃないと食べれないわね。人には無理だわ。でも、力と呼ぶには大げさかしら」

私は神様だから食べなくても平気っていう話はしたわね」

頷く。

「それはつまり食べても太らないし、満腹感もないってことなの」

「それってつまり無限に食べられるってことか？」

「そう、だからあのパフェが食べられたってわけなの」

それならそうと早く言ってくれ。あの時俺がどれだけ慌てたことか。

そう呆れていると不図思った。

食べても、食べても満腹になることはなく、無限に食べ続けられる。ただ聞けば別にどうってことのない、聞く人が聞けば便利とさえ思つかもしれない。それはつまり食べるという行為で満たされないということじゃないか。

それは便利なことではなく、不便、いや苦しみにさえ感じる。

これは人間としての価値観であって、神様の時和はそう感じてないかもしれない。

けど俺にはそう感じる。

俺はできれば神様なんかにはなりたくない。

「でも、縁くんから貰ったあのめろんソーだって言う飲み物には驚いたわ。飲んだら舌がヒリヒリするんだもの。毒でも入ってるかと思っただわ」

考えごとをしていると時和が話しかけてきた。

暗い顔を一度リセットする。

「だからって店の中で毒が入ってるって騒ぐことはないだろ。店員と客どん引きだったぞ」

その後、俺が必死に誤解を解いた。流石に炭酸飲料も飲んだことがないお嬢様っていう言い訳は怪しかったかもしれないが。

「だいたいなんで炭酸飲料を知らないんだよ。お前高校生だよ」

「しょうがないわ。こっちの世界に来たのは高校に入学してからだもの。知らないことだらけよ」

「入学してからってことはまだ二カ月も経ってないのか！」

「ええそうよ。百目鬼の口利きで入ったの」

となぜか偉そうに言う。

「ってことはなんだ。お前もしかして金の価値もしらないのか？」

「お金？ 触ったことすらないわ」

道理で平然と一万円のパフェを人に奢らせようとするわけだ。

「ここでちよっと教えるから覚えろ」

と道中だが財布を出して、二枚のお札を取り出す。

「これが五千円でこれが千円だ」

「どちらも人の顔が映ってるわね」

お札をしまつて、今度は小銭を取り出す。

「順番に一円、五円、十円、五十円、百円、五百円だ」

「そんなにたくさん覚えられないわ」

「覚える。これから最低三年間はこつちで生活するんだろ。知らないきゃ不便だ」

人間なら不便なんてレベルじゃない。普通生きていけない。神様のコイツだから許される無恥さだ。

「これが一円、これが十円、これが百円」

時和は俺から渡された小銭を触りながら読んでいく。

「これが五十円？」

「それは五円だ」

「どっちも穴が空いていて見分けずらいわ。これが五円ね」と五円玉を持つとそのままジッと見つめる。

「つまり五円は縁くんってことね」

「はあ？」

どうしてそうなる。

「だって五円を言いかえるとこ縁でしょ。ほら縁くん」

「そんな言葉遊びはいいから覚えろ」

「覚えるために言ってるのよ。縁くんは五円って覚えればいいわけね」

コイツは喧嘩を売ってるのか？

時和湖に着く頃にはすっかり覚えたらしく。言い詰まることなくそれぞれの金の名称を言っていた。

「ねえ、このお金私にukれない？」

と別れる時にそんなこと言ってきた。

「別にいいけど、五千円と千円はダメだ」
五百円はオマケでいいだろ。

「え、どうしてその二つだけダメなの？」

まあ名称を覚えたところで、その価値を知らなかったら意味がないけどな。

それは追々教えるでしょう。

それから時和の呼び出しは何度があった。

時和湖の雑草が伸びてきたから草むしり手伝えとか、お寿司が食べてみたいから店に連れてけとか、昨日なんかは釣りがしてみたいとか言い出したので、釣竿を貸して時和湖でやらせた。流石に自身に釣り糸を垂らすのが不服だったのか、すぐに止めていたけど。未だに俺と時和の呼び、呼ばれる関係は続いているわけだ。

だからこんな日もいつかは来ると思っていた。

「おい、五月女。お前時和さんと付き合ってるって本当か？」

昼休み。さつき食堂へ行ったはずの篠崎が飛んで戻って来た。

「また噂か？」

「そうだよ。食堂で今さつき聞いたんだ。時和さんと五月女が付き合ってるんじゃないかって。どうなんだ。どうなんだ、五月女！」

篠崎が俺の机を叩く。目が血走っててかなり怖い。

「いや、付き合っていない」

「嘘吐くな！ ネタは上げてんだよ！」

ここは取調室か。

「商店街の喫茶店でツーショットの写真を見たって言う奴もいるし、駅前の回転寿司でお前たちを見かけたって奴もいる。これはデートじゃないのか？ どうなんだ！」

コイツは俺がどう言えば納得するんだ。

「だから俺と時和がそんな関係じゃない。確かに俺は写真も撮ったし、回転寿司も行った。でも、それはただの友達として付き合わせただけだ」

そう説得すると「つ、付き合わされた」となぜか頭を抱えてそのまま崩れ落ちた。

「付き合わされた……つまり向こうから誘ってきた。向こうから、つまり脈アリ。可能性大……」

なにかぶつぶつ言っている。

怒ったり落ち込んだり忙しない奴だ。

そんな篠崎はほっておいて俺はさっさと昼食を食べ始める。コンビニで買ってきたパンたちを広げる。

まずは焼きそばパンから、と一口食べると、篠崎がバツと立ち上がった。そして俺に顔を近づける。

「顔近いぞ」

俺の要求は無視して、篠崎はべらべら喋り出した。

「お前と時和さんの友達以上恋人未満な関係は認めよう」

いや誰もそんなこと言っていない。

「だからそのお前に頼みがある」

「頼み？」

「実は今度、一年生親睦会という名目でパーティーをすることになったんだ」

「この時期に親睦会って、ちょっと遅すぎるんじゃないか？」

「いやいやまだ他のクラスで知らない奴とか多いだろ。それにお前みたいな奴もいるし」

大きなお世話だ。

「だからこの親睦会で友達をいっぱい作ろうって計画だよ」

どうも胡散臭い。だいたい最初に親睦会という名目って言うているし。

「口実はいいから。本当はどういう会なんだ？」

「男女の出会いの場の提供」

「……………」

まあなんとなく予想は出来たけどがこうもはっきり言われると呆れてしまう。

そしてこの話の流れでくれば、俺への頼み事もなんとなく予想できる。

「それで俺に時和を誘ってきて、というわけか？」

「流石は五月女、察しがいいな」

思わず溜息が漏れる。そんな面倒なことをなんで俺から誘わないといけないんだ。それに時和がそんな怪しい会に来るわけ……………どうだろうなあ。

時和は友達ほしがってるし、名目だけ聞けばのこのこ行くかもしれない。

「なあ頼むよ。場所は駅前のホテルのパーティー会場でやるんだ。結構本格的だろ」

確かに駅前のホテルって言えば結構な高級ホテルだ。

「よくそんなところで出来るな。参加費とか高いんじゃないか？」

誘って時和が行くとなれば必然的に俺も行くことになる。そうなれば時和の参加費も俺が払うのだ。一人分でも高かったらその時点で断ろう。

「そうだろ！　だが何と参加費はなんと一人千円だ！　学校の方で少し負担してくれるんだよ」

「学校が？　てことは学校側も公認してるってことか？」

「そうだ。なんでも理事長がポケットマネーを出してくれたらしい。ホント、理事長様様だよ」

理事長、つまり百目鬼が認めたわけだ。

なんとなく意図が察せた。

つまりこれで問題はクリアしてしまったわけだ。百目鬼が公認してるってことは不純な場でもないんだろう。

「わかった。それとなく話してみる」

「それとなくじゃダメだ！　真剣に話せ！　時和さんが来るとなれば盛り上がるし、参加者も増える」

「わかった。真剣に話す。それで日時は」

昼休みは親睦会の説明を訊いて終わった。

縁はけいどろ初体験

六時間目の数学。なんとも気の弱い教師による授業は、まるで幼稚園のお昼寝の時間のように生徒たちが睡眠をとっている。

その隣の席。篠崎もその一人なのだが、
ぐうぐう。

「がぁぁ、すう、がぁぁ、すう」

なぜかイビキと腹の虫が合掌していた。

昼休みは俺と親睦会のことと話していて昼食を食べ損ねたことは知ってる。その原因が俺にもあることも。

だが、どうしてこんなだらしないんだか、器用なんだか、わからないことができるんだ。

おかげで授業中に寝ていない数少ない俺は集中して受けられなかった。

授業が終わって文句を言ってやろうと席を立ったところで、教室にあるスピーカーから放送が入る。

『一年三組、五月女縁。至急理事長室まで来い』

教室内が急に静かになった。

この声は百目鬼だ。しかも相変わらずのぶっきらぼうな言い方で怒っているように聞こえる。

教室内からは、

「なにやっただ、五月女のやつ」

「理事長室に呼び出して聞いたことないぞ」

「そつえばほら五月女って時和さんに手出してるって噂だから理事長が怒ったんじゃない」とこそそと聞こえてくる。

頭を抱えなくなる気持ちを抑えて、理事長室へと向かう。廊下で知れ違う生徒たちの視線が痛い。まるで護送車に乗せられるまで犯罪者のようだ。

理事長室前に来ると、自分の身なりを整える。たとえ理事長が百

目鬼でも理事長室に入るのは緊張する。

覚悟を決めてノックをする。

「五月女です。呼ばれて来ました」

「入れ」

扉越しからの返事を確認して中へと入った。

理事長室というから校長室より装飾が多いのかと思ったが意外と素朴な部屋だ。

「呼び出して悪い。座ってくれ、今コーヒーを淹れる」

と百目鬼はソファを指す。

「いや、すぐに教室に行かないとホームルームが始るからいい。それより早く要件を話してくれ、百目鬼」

「学校では理事長だ」

「離してくれませんか、理事長」

意外ときつちり区別するタイプみたいだ。

「安心しろ。お前の担任にはホームルームに行けないことと言ってある。話が終わればお前はすぐに帰れるようにした」

それは手回しが早くてありがたいが、ホームルームにいなかったらまた変な噂が立ってしまう。出来るなら早く帰してほしいのだが、理事長にそこまで言われて「それでも帰らせてください」なんて言えない。

「わかりました」と素直に頷いてソファに座った。

コーヒーの入ったティーカップがテーブルに置かれると話が始る。

「お前、今度やる一年生の親睦会は知ってるか？」

「はい、友達から聞きました」

「……………」

百目鬼はコーヒーを一口飲んだ。

「お前、友達いたんだな」

なんで俺の周りにはこうも失礼な奴が多いんだ。

「それなら話が早い。できればそのパーティーに天音を誘ってほしい」

親睦会の話が出た時点でなんとなくわかっていた。

「それは別にいいですけど、どうして自分で誘わないんですか？」

「……天音は俺から金銭的な工面を受けることを快く思っていないんだ。この高校への入学も私が周りを押さえつけてどうにかできた。もちろん入学金や授業料なんかも俺が払ってる。天音はこれ以上迷惑はかけられないと思ってるらしい。」

だから私が親睦会に誘ったとしても来るかどうかわからない。もしかしたら嫌な思いさせてしまうかもしれない」

百目鬼は無表情でたんたんと語る。だが、明らかに様子が違う。初めて会った時の無口な性格はどこに行ったんだと思わせるくらいよく喋る。いや、時和湖の宴会の時もこれくらい喋っていたかもしれない。その時も確か話していた内容は時和についてだ。

百目鬼は時和が好きなんだろう。恋愛感情という意味ではなく、親が子を想う感情のような意味で時和を大切に思ってる。でなければ、こんな面倒な親睦会を開催したりしない。

時和は恵まれていると思う。こんなにまでも自分を想って大切にしてくれる奴がいるんだから。

「わかりました、引き受けます。でも一つ訊いていいですか？」

「話せることなら」

「どうしてそこまで時和を大切にするんですか？」

だから俺は時和に嫉妬した。自分を深く理解してくれる人がいることに嫉妬してしまった。

言葉は荒くなり、質問もこれではまるで挑発だ。

なんで他人をそこまで大切に思える、そんなことをして本当に意味があるのか。

この質問を俺はこんな意味を込めて言い放った。

「かなり昔の話になる。俺はある山の大將として妖怪やアヤカシを引き連れていた時期があった。だが、領地を広げようとする他の妖怪の勢力と抗争を起こして負けて、辛くも逃げ切った俺はここに流れ着いた。その時、体はズタズタで満身創痍だった俺を助けたのが、

時和湖の一つの自我として目覚めたばかりの天音だった」

「つまり恩返しってことか？」

百目鬼は首を横に振る。

「いや、恩返しってだけで何十年も誰かの傍にいたりしない。俺は天音の広い器に惚れたんだ。どんな醜悪で邪悪な妖怪でもアイツは受け入れる。それで仲間にして前のように宴会をしてるんだ。誰でもできるようなことじゃない。現に俺は争うことでしか仲間を作れなかったし守れなかった。俺には何年かけてもできないことをアイツは無意識でやってる。それを知った時、俺は天音の力になろうと思ったんだ」

前に俺は天音と自分が似ていると思っていたが、どうやら勘違いだったようだ。天音には誰とでもやっていけるし、仲良くなることができる。こっちの世界だと、自分の正体を知られるのを怖がって少し臆病になってるだけだ。俺と接しているような、妖怪やアヤカシたちと宴会をしているような時和を見せれば人の友達になんてすぐできる。アイツはそういう奴だ。

さっきまでの自分が恥しい。なにを嫉妬していたんだ。だいたい人間の高校生が神様に嫉妬ってどれだけ生意気なんだ。

自己嫌悪に苛まれる。けどそのことに気付けたのは良かった。

「そうですか。話してくれてありがとうございました」

コーヒーを飲み干してその場を立ち上がった。

「いや俺もお前に話せてよかった。これから天音のことを頼む」
これまでのことを思い返すとすぐに「はい」とは返せなかった。当たり前障りのないように「努力はします」とだけ言っておいた。

理事長室を出てすぐに教室に荷物を取りに行った。教室には何人かの生徒が残っているようで、俺が入るとすこし雰囲気重くなった気がした。なぜか本格的に時和さんに手を出している悪人として定着しつつある。

そんな雰囲気耐えられるはずもなく、さっさと教室を出た。
昇降口までくると、靴を履き替えるために下駄箱を開ける。

「今日はないな」

この頃は履き替える前に下駄箱に便箋が入ってないか確認するのが習慣になってきている。今でも時和は俺を呼び出すときに便箋を使っているのだ。前にその理由を訊くと「そっちの方が二人だけの秘密みたいでいいでしょ」と茶化す様に言っていた。

まったくもって環境に悪い神様だ。

とりあえず放課後が自由になったことで解放感が生まれた。今日は家でゆっくりできる。久しぶりに昼寝でもしようか、なんて考えてコンビ二の前に差しかった時、不意に頭になにか当たった。当たったというより後頭部に何かが触れたと言う方がいいたろうか。振り返るが、そこには誰も何も無い。不思議に思っただ後頭部を撫でるが特に何か付いてるわけでもない。

気のせいと思い、歩きだした瞬間、何かを踏んだ。

足元に視線を向けると、そこには便箋で作られた紙飛行機があった。しかもこの便箋は時和のものだ。

「まさかな」

ただの偶然だろう、とそれを拾い上げて紙飛行機をただの一枚の紙にした。

『学校近くの公園に大至急集合』と書かれていた。

俺は慌てて辺りを見回した。そこに時和の姿もなく、紙飛行機を飛ばしたような人もいない。

じゃあいったいこれは何処から来たんだ。

考えるのは後にして公園に向かって歩き出した。たぶんそこへ行けば答えはわかる。

「遅い！」

いつもの怒声を聞いて公園の敷地内へと入った。時和と小学生たちが出迎えた。

「悪かった。で、いったいどうやって飛ばしたんだ」

反論は「言い訳するな」の一言で言い包められるのもうしない。それよりもこの紙飛行機の謎が知りたい。

「決まってるでしょ。それも神様だからできるのよ。縁くんに届くように飛ばせば造作ないわ」

と胸を張って威張る。「これが本当の神業ね」なんてくだらないジョークも呟く。

「それでここに呼んだ要件は？」

「うん、実はこの子たちとけいどろをすることになったんだけど、集まった人数が奇数で割り切れないのよ。だから縁くんにも参加してほしいの」

「……………」

今までで一番くだらない用事で呼ばれた気がする。だいたい人数が奇数ならお前が抜ければいい話だろ。

まあ、そんなことを言って納得する相手なら苦労はしてないんだが。

「どうしたの、縁くん？　もしかしてけいどろ知らない？」

「それぐらいは知ってる。警察と泥棒に別れて、警察が泥棒を捕まえればいいんだろう」

そして捕まった泥棒は刑務所と決められた範囲に入れられ、仲間のタッチで逃げられるってゲームのはずだ。警察は泥棒を全員捕まえれば勝ち、泥棒は……小学生で言えば休み時間が終わるまで逃げ切れたら勝ちか。

「そのぐらいは知ってるんだ。じゃあ、やったことはあるの？」

「……………」

うるさい。そうだよ。やったことないよ。同級生がやってるのを見たことあるだけだよ。文句あるか。

なんて心の中で悪態を吐いていると、小学生たちが時和の周りに集まって来た。

「ねえこの人がお姉ちゃんのお友達？」

「そうよ。縁くんっていうの」

「えにし？　変な名前」

「おいえにし。お前足速いんだろうな」

「ダメだよ、タケくん。年上の人にそんなこと言っちゃ」

「だってコイツ速そうじゃないんだもん」

「でもお姉ちゃんの友達にしてはパツとしないね。もっとカッコいい人かと思ってた」

「期待外れだったね」

総勢八人の小学生たちが好き放題言ってくれる。

この頃、罵倒されてばっかだな。

「ほら、そんな言っちゃいけません。見た目はパツとないけど、こういう見て縁くんも役に立つんだから」

時和も時和で結構失礼なこと言ってるけどな。

「じゃあ何できるの？」

当然の疑問が時和に投げかけられる。

「え？ そうね、縁くんは皮肉とか厭味を言うのが得意だわ」

「なにそれー」

「簡単に言くと人の悪口よ」

「じゃあ、えにしは嫌な奴なんだ」

「そうね。縁くんは嫌な奴よ」

「どうしてフォローに入ったお前が罵倒する側に回ってるんだ！」

まるで時和が九人いるみたいだ。ドツと疲労感が押し寄せる。

「それでけいどろやるんだろ。さっさと始めるぞ」

まったくけいどろをやる雰囲気じゃないので話を進める。

「じゃあ、チームを決めようぜ」

「グウパーで決めよ」

「じゃあ、いくぞグウとパーで合った人」

男の子の掛け声で一齐にグウかパーが出される。

その結果、俺と時和は違うチームになって、俺のチームが警察、時和のチームが泥棒になった。

そして泥棒が逃げ始め、十秒後に警察が追い始めた。

とりあえず足の速そうな奴から追う。見た感じだと女の子の方はそうでもないが、男の子の方で一人すばしっこそうな奴がいる。警

察の男の子に追われているが、なかなか距離が縮まらない。

よし、と気合を入れて男の子の死角へと回り込む。そして警察が諦めて安心感からかスピードを落としたところにダッシュして近づき、肩をポンと叩く。

「一人、逮捕」

「え！」

男の子が驚く。

こういうゲームで体力がない奴は頭を使うのが鉄則だ。俺はただ走りたくないだけだ。

「じゃ連行」

と男の子を刑務所に見立てた円の中へと容れる。

そんな要領でどんどん泥棒を捕まえていくと、十分後に一回目のけいどろは終了した。

みんなは刑務所の円に集まる。

「意外と早く終わったな」

「縁くん、大活躍ね」

と時和が珍しく褒める。

「でも、あれはなんか納得いかねえー」

「いきなり出てくんだもんなー」

「男らしくない」

小学生たちから批判の声が上がる。

「あれが頭を使ったやり方だ。ただ体力まかせに追えばいいってわけじゃないぞ」

「じゃ、今度は警察と泥棒を逆にしてやりましょ」

時和の提案で二回目が始った。

そして十分後。

「ハアハアハア」

俺はその場に座り込み呼吸を整えていた。

「えにし使えねえ」

「なんで大して走ってないのにそんな疲れてんだよ」

「体力なさすぎ」

結果は散々なものだった。最初の方は好調に逃げていたが、後半体力がなくなり即座に捕まった。

というか、けいどろってこんなに疲れるものなのか。

子どもの遊びを舐めていた。

「警察の時は大活躍だったのに。縁くんは泥棒にはなれないわね」
なれてもならん。

「でも日本の秩序のために警察にもならないで」
もうツツコム気にもおきない。

喉の渴きを潤すために公園内にある自販機へと向かう。どれにしようか迷っていると、一人の女の子がジッとこちらを見ていた。

なんだその物欲しそうな目は。

溜息を吐く。子どもの前で飲み物を買おうとした俺が間違っていた。

「どれがいい？」

「え？」

「飲みたいんだろ。どれがいいんだ。買ってやるよ」

「でも、お母さんが知らない人から物を貰っちゃいけないって」

二回一緒にけいどろやっただけじゃまだ知らない人なのか。世知辛い世の中になったものだ。

「一緒にけいどろやっただろ。それに俺の名前も知ってる」

「うん、えにし」

女の子のまでもに呼び捨てにされるのか。

「なら、君の名前は？」

「ユウカ」

「よし、ユウカ。これで俺たちは知り合いだ。ほら、何が飲みたい」
そういうとゆうかは目を輝かせてリングジュースを指刺した。

金を入れてボタンを押すと、リングジュースが出てくる。それを手渡すと、嬉しそうに小学生たちの輪に戻って行った。

やれやれと自分の分を選び始める。

「ずりー、なんでユウカだけジュース飲んでんだよ！」

この声を聞いた時、ユウカにジュースを買ったことを本気で後悔した。

結局八人全員にジュースを買う破目になった。

「優しいのね、縁くん」

「別に優しくない。一人に買っちゃったんだから全員に買わないと不公平なだけだ」

「かっこつけちゃって」と頬をしきりに突いてくるので「うぜえ」と言っただけの手を払った。

「でも、その優しさを私にも分けてほしかったな」
嫌な予感。

「ジュース私も飲みたいわ」

「ダメだ」

「あら、どうしてみんなには買ってあげたのに私にはくれないの？」

「なのな。もう金がないんだよ。俺も結局飲めないんだよ」

「そうね。私たちは保護者として子どもたちが美味しくジュースを飲んでる姿を暖かく見守りましょ」

「おい、かなりの語弊があるぞ。なんで俺たちが保護者なんだ」

「え？　そういう役回りじゃないの？」

「なんだ、役回りって。初耳だぞ」

「設定は縁くんの隠し子が——」

「設定とかいいから！」

怖くなったから時和の言葉を遮った。俺の隠し子ってなんだよ。疲れて俯いていると、ユウカが俺の前に立っていた。

「どうした？」

「これ、あげる」と言っただけでジュースを差し出してきた。

久しぶりに感じた優しさに少し感動した。ユウカが天使に見える。

「いや大丈夫だ。家に帰ればあるから」

「でも……」

「それはユウカのだからユウカが飲め」

そこまで言ってユウカは納得したように頷いてジュースを飲む。

「縁くんってロリコンなの？」

「……………」

どうしてコイツはそういうふうでもいいことは知ってるんだ。

「断じて違う」

「え、でも小さい女の子に優しい男の子はロリコンだって友達が言っていたわ」

その友達とやらと一度真剣に話合わなくちゃいけないような気がする。

「あんな、子どもに優しくない人なんてそれこそ冷血漢だ。お前だって子どもには優しいだろ。それと一緒にだ」

「そうなの？ それなら安心だわ」

そう言つと時和は子どもたちの輪の中へと向かった。

時和と小学生たちを見つめる。小学生たちは時和を慕っているように、時和も小学生たちと話している時は生き生きとしている。学校での清楚なお嬢様じゃない。

子どもを相手にする方が楽なんだろう。子どもは良くも悪くも普段周りに見せてる表面だけを見て人を判断している。だから時和も臆病になることなく接することができる。高校生くらいになると、人の裏側、人には知られたくない秘密なんかには興味津々だ。人の噂は絶えずないし、憶測が毎日のように飛び交ってる。

だが、本当にそれだけなのか。百目鬼が言つたような器が時和にあるなら、学校の生徒だって友達になれるはずじゃないだろうか。それとも神様と人間にはそれだけの深い溝があつて簡単には相容れないのか。

しかしこれは俺が考えてもしかたないことだ。結局は時和が勇気を出して一歩前に踏み出せるかどうかだ。それは人間の俺には計り知れない勇気がないとダメなのかもしれない。けど人間の世界で友達を作りたいならやるしかない。

学校で本当の時和を見ることができる。そんな日が来るのだろうか

か、と考えていると一人の男の子が目の前に立っていた。

名前は確か――

「タケだっけ？」

女の子がそんな風に呼んでいた。

「それはミホがかつてに呼んでるだけ。俺の名前はタケシ」

「それは悪い。で、タケシはみんなのところに行かないのか？」

「お前に聞いたことがある」

と隣に座る。

「お前ってお姉ちゃんの彼氏か？」

「いや違う」と即答。

「じゃあ好きなのか？」

「ぜんぜん」と即答。

「じゃあ人を好きになったことはある？」

「……人を好きになったこと？」

一度もなかった気がする。

というか人を好きになることってどういうことだ？ そろいった経

験も体験もないからわからない。

「ないな」

呟くように答えるとタケシはあからさまに舌打ちした。

「つつかえねえ」

「なんだ。そういうタケシは人を好きになったことあるのか？」

「お、俺は別にないよ……」

言いながら視線が小学生たちの方へと向く。正確にはその中にいた女の子に。

あの子がたぶんミホだろう。で、タケシの意中の人か。

「そうか。まあ出来たら優しくしてやるんだな」

たぶん恋愛相談みたいないなことをさせようとしたんだろ。でも完全に人選を間違ってる。俺にその手の話をしてもらいたく気の利いた言葉も言えない。

「男二人で何やってるのよ」

みんなが俺たちの周りに集まっていた。その中にはとうぜん三木もいるわけだ。

「な、なんでもねえーよ」

タケシはぶつきらぼくに答えると立ち上がった。

「ほら、チーム変えてもう一回やるぞ」

タケシの掛け声で、みんなが円を作った。

「え、まだやんの？」

初のパーティーは苦い思い出

その後、チームを変えて二回やると、夕方になり子どもたちは門限があると言って帰って行った。

時和と二人で子どもたちを見送ると岐路に着いく。

「久しぶりに動いて楽しかったわ。またみんなでやりましょ」
体を解すように背伸びをする時和。

「それよりなんで小学生と遊ぶことになったんだ？」

「偶に公園に寄るとみんなが遊んでるから入れてもらうのよ」

道理で小学生たちと初対面じゃないと思ったら、これが初めてじゃないのか。

「お前なあ。そんなことするなら学校の奴と遊べばいい。そんなんだから友達ができないんだよ」

そのために学校通ってるんじゃないのか。

「学校の人々と遊ぶとお金が掛かるから遊べないのよ。それに最初はみんな誘ってくれてたけど断り続けたら誘われなくなっちゃったわ」

確かに高校生の遊びには金が掛かる。カラオケ、ボーリング、映画、どれをとつてもとても安いとはいえない金が必要だ。

これが時和に友達ができない原因か。

一つ目は時和自身が臆病になっていること。

二つ目が高校生は人の裏側や秘密に興味津々なこと。これは一つ目と連動しているし、どうこうできる問題じゃない。

そして最後が人間の世界で生きるうえでの必要最低限なものを持つていないこと。

この三つ、実質的には二つをどうにかしないと時和に友達はできない。

つまり気持ちと金があればいいわけだ。

「それよりどうして縁くんが私が友達ができないことを知ってるの」

そこで口が滑ったことに気が付いた。このことは百目鬼から教えてもらったことで時和本人からじゃない。

でも、口止めされてたわけじゃないし。

「百目鬼ね。まったく普段は無口なくせに口が軽いんだから。」

縁くんも私が友達のいない悲しい神様だと思ってるようだけど違うわよ」

「へえ友達がちゃんといるのか？」

「もちろん。休み時間にはみんなと話すし、移動教室の時はみんなと一緒に行くわ」

「でも気の許せる友達はいない、と」

時和は「う、むう」と言い淀む。

「気になってたんだけど、時和の言う気の許せる友達ってどの程度行っただけ呼べるんだ？」

「自分の正体を明かせるくらいかしら？」

ポツンと出た言葉はかなりハードなものだった。それはつまり時和が神様だ、と知っても普段通りに接してくれる友達ということだ。それは流石に無理じゃないか……。

「時和、もう少し現実的なものにしないか。休日一緒に遊んでくれるとかさあ。じゃないと三年間で気の許せる友達なんてできないぞ」というか信じてすらもらえないだろ。

「私はそんなことで妥協したくないの。それに自分の正体も明かせない相手が気の許せる友達とは言えないわ」

「確かにそうだけど……」。

時和、正直言っただけなら奴いらない。お前の正体を知ってもお前を普通の友達として接してくれる人間なんてこの世には存在しない」

突き離すようなことを言っただけで自分でもわかってる。でも、誰かが言わないといけない。時和が思っているほど人間は出来た生き物じゃない。自分と違うものは遠ざけるし嫌う。

そんな考え方でいたら傷つくのは時和だ。

そのために厳しく言い放ったつもりだったのだが、時和はこっち

を向いて微笑む。

「いるわ」

「時和、もう少し現実を見る。人間はそんな綺麗な生き物じゃない。お前かなり長生きなんだからそれぐらいわかるだろ」

ここで引いちゃダメだ、と強気で言った。

だけど時和は微笑んだまま――

「だって縁くんは私と一緒にいてくれるじゃない」

とだけ言った。

「……………」

二の句がでなかった。「俺にはこの目があるから」だとか「百目鬼に頼まれたから」だとかいろいろ返す言葉はあったのに、何も出てこなかった。

時和が自分をそんな風に思ってくれてたことに驚いた。俺自身、ただの便利な人間としか思われてないと考えていた。だからあの言葉がこうも心に突き刺さった。

そんなこと言われたら協力するしかなくなるだろ…………。

「おい、お前今度やる一年生の親睦会知ってるか？」

「親睦会？ 初耳だわ」

もともと俺が公園に来た本当の目的は親睦会に誘うためだ。いろいろと遠回りになったけど。

「その名の通り親睦を深める会なんだけど。お前、行くか？」

そう言つと時和は目を見開いた。

「もしかして誘ってくれてるの？」

「まあそうだな」

そうはつきり言われると恥ずかしいものがある。

「そう。縁くんから何かに誘ってくれたのは初めてね。なんだか嬉しいわ」

と本当に嬉しそうな顔をする。

「それはお前がいつも俺を連れ回すからだろ」

「あら、じゃあ私が誘わなかったら誘ってくれたの？」

「……………」

そう言われると誘わなかっただろうなあ。

「ほら見なさい」

「まだ何も言っていないだろ」

「顔に書いてあるわ」

無意識に顔を触ってしまった。

その姿を見て笑ってる時和を見てしまったと思っても遅い。時和の目は「ほらやっぱり」と言ってるようだ。

「まあいいだろ。今、誘ったんだから。それで行くのか行かないのか」

「そうね。縁くんがエスコートしてくれるって言うなら行ってあげもいいわよ」

「親睦会だつてのに俺がエスコートしたら意味ないだろ」

「それもそうね」

あっけらかんと言う時和。

コイツやる気あるのか。

「なら行かないわ」

「はあ！」

思わず声を上げてしまった。

やる気以前に行く気がないのかよ！

「お前、だって友達がほしいんだろ」

「ええ。でも、お金が掛かるんでしょ？」

そうかそこを気にしてるのか。

「縁くんにお金のこと教わってだいたいの価値はわかってるわ。これ以上誰かにお金のことでは迷惑かけたくないの」

「俺の小銭はとっただろ」

「あれは勉強のためよ。使っていないし後で返すわ」

そう言われると俺が六六六円程度でウジウジ言ってる器の小さい

人間の思えてしまう。

思い通りに伝わらない苛立ちから頭を掻く。

「あのさ、今まで散々連れ回しといて、今更遠慮とかするな。確かに金は掛かるけど千円だ。俺にだって二人分くらいは出せるし、このままだと友達なんて出来ないままだぞ」

そう言われて時和は梅干しを食べたような渋い顔をした。俺の言葉と自分の尊厳が戦っているのだろう。

まったく常識があるんだか、ないんだかよくわからない奴だ。ほぼ毎日のように俺を呼び出して連れ回すくせに、金のことになると消極的になって遠慮する。その二つを足して二で割ったらいい感じなるな。

そんなことを考えていると戦いは勝敗がついたようだ。

ジツとこちらを見つめたかと思うと、腰を四十五度に曲げた。なんとも深深なお辞儀だ。

「よ、よろしくお願いするわ」

何今更改まつてるんだ、と思わず笑いそうになったが耐えた。

譲歩した結果、礼を尽くすことで自分の尊厳を引っ込めたらしい。

その決断を笑うのは失礼だ。

「わかった」

こうして俺と時和は親睦会への参加が決まった。

親睦会は平日の午後六時から午後八時までの二時間行われる。本当は休日に行われるはずだったのだが、急に開催することが決まったのでホテルを予約できなかったらしい。結果的に学校の授業を終えて帰ってから行くみたいな流れになった。

俺は正直言つて休日の方がよかった。じいちゃんの家は街の田舎側にあつて交通に不便だ。それなのに一度戻つてまた行くなんて面倒だ。学校で時間を潰して行こうかとも思ったが、誘った手前時和と一緒にいかないといけない。

「おい、縁。友達が来たぞ」

茶の間で煎餅を食べて二ユー番組を見ているとじいちゃんの呼ぶ声が聞こえる。

ぎしぎしと軋む廊下を歩いて玄関へと行くと、じいちゃんと時和の姿があつた。

「なんだ、縁。こんな美人を連れて行くのか。お前もやるようになったのぉ」

「違う。友達だつて言ってるだろ」

と言ってるのにじいちゃんは聞いてない。笑いながら家の奥へと消える。

まったくあの色ボケジジイが。美人を見ると目の色変えやがって。歳を考えろ、歳を。

「縁くんのおじい様って面白い方ね」

「やめる。おじい様なんて柄じゃない。ただのジジイだ」

と訂正して時和を見る。赤い牡丹が描かれた着物着て、手にはを持っている。

確かに俺は親睦会にはパーティーに見合つたものを着て来いと言つたがまさか着物とは。

「どう似合ってるかしら」

時和は軽く両手を上げて、着物全体が見えるようにする。確かに今まで着た中で一番似合つてると言っている。時和は何処となく赤が似合う。だかそれを素直に言うのも、なんだか癪だ。

「ま、いいじゃないか」

どうでも良さそうに答えると時和はなぜか笑う。

「なに笑ってんだよ」

「だって、縁くんってホント顔に出るんだもの。嘘を吐くとすぐにわかるわ」

なんとも自意識過剰なことを言ってるが、当たっているのだから返すことができない。

「んなことはいいから行くぞ」

無理やり話題を終わらせて、靴を履く。

「行かつて縁くん、その格好で行くの？」

俺の格好を見て時和が言う。

俺が着てるのは学校指定の制服、世間で言うブレザーだ。

「ああ、そうだ」

「縁くん昨日自分が言った言葉覚えてる？」

「時間には遅れるなか？」

「パーティーなんだからそれに見合ったものを着て来いって言うってたわ」

確かに言った。だがそれは時和に言ったのであつて自分にはない。そもそも時和が行かなければ俺も行かないのだ。言つてしまえばこれは時和のためのパーティーだ。俺がいくら着飾っても仕方がない。

「いいんだよ俺は。それにお前だつて普通ドレスっぽいもの着てるだろ。なんで和服なんだよ」

「私、洋風のもものは学校の制服しか持つてないわ。だから着物の中でも一番のお気に入りを選んできたのよ」

持つてる洋服が学校の制服っていつの時代だよ。と神様に言つても仕方がない。

「まあ、いいけどな。」

それじゃあじいちゃん、行つて来るぞ」

と声を張ると、「おお、すっかりやつてこい」と返事がくる。

何をやるんだよ。

徒歩しか移動手段を持たない俺は歩いてホテルまで向かう。とうぜん時和もそれに合わせて歩くのだが、今日だけはタクシーでも呼べば良かったと後悔する。

通行人の視線が凄いのだ。

見た目だけでも目を引くというのに、それに加えて着物だ。通行人のほとんどが時和を目で追う。特に男なんかは目を見開いて見つめる。

早く着けと心の底から願った。

だがホテルに着いたら着いたで最悪だった。時和のことを知ってる奴が殆どだからそれほど騒ぐことはないだろう、と思っていたが、やはり着物の効果が絶大だったらしい。会場に入ったとたん歓心の声（主に男子）が上がった。

時和効果スゲー。

などと感心していると親睦会の開会式が始った。開会のあいさつと主催者からの言葉（篠崎だったので一瞬ビビった）、それからスポンサーである百目鬼の言葉が終わると親睦会は始った。

いくつかの円テーブルに様々な料理がのり、ウェーターらしき人が飲み物を運んでいる。金持ちのパーティー宛らだ。

どれだけ気合入ってるんだ、百目鬼。

なんて思っていると隣に時和がいないことに気付く。辺りを見回すと一つのテーブルに人だかりが出来ている。その中に時和はいた。着物のことについて質問攻めされているようだ。凄い慌ててるのがここからでもよくわかる。

時和は時和で頑張ってもらうとして、俺は千円分、料理を食べさせてもらうことにしよう。取り皿を持っていくつか料理を取って食べる。

マジでうめえ。

「おい、五月女」

料理を堪能していると主催者様が声を掛けてきた。

「篠崎か。どうした」

「どうしたじゃねえ。なんでお前、制服なんだ」

「いや俺が着飾ってもしょうがないだろ」

「しょうがないって周り見てみる。制服の奴なんて一人もいないぞ」
言われるがまま周りを見る。

確かに制服の奴なんて俺ぐらいだ。

「でも、私服はいるだろ」

「それでもそれなりにお洒落してる。タキシードの奴だっているん

だぞ。それなのにお前は」

嫌だ嫌だみない顔で見る。

「まあいいだろ。ちゃんと時和を連れて来たんだから」

そう言った途端篠崎の顔がデレっとなり、気色悪いものになった。「その点はよくやった。まさか着物のオマケ付きとは思わなかったけど」

と言つて篠崎は時和を見つめる。その視線を追うようにして俺も時和に目をやった。

未だに人だかりが出来てる。その人だかりの中で何人が時和の友達と呼べる人間になるのか。それはわからないが、そう簡単に出てくるとは思えなかった。

公園の帰り道で俺の問いに対し「自分の正体が明かせるぐらい」と時和は言った。あの中で時和の正体を受け止められる人間がどのくらいいる。いや、その前に真摯に受け取ってくれる人間すらいなかかもしれない。頭のおかしい電波女と見られるのがオチだ。それに時和は自分の正体が知られることを怖がっていると百目鬼は言っていた。真偽はわからないが、そんな状態で明かせるわけない。

やっぱり無理じゃないか。

同じく公園の帰り道で俺の言葉に時和は「縁くんは一緒にいてくれる」と言った。その言葉で俺は手伝うことを決めたとし、その決意に揺らぎはない。しかし不安はある。

「五月女」

いつのまにか百目鬼が隣にいた。

篠崎が「おおっ！ 理事長いつのまに」と驚きの声を上げる。

俺はもう慣れた。

「どうかしたんですか、理事長」

「なんだお前の格好は」

どうやら理事長様は自分の学校の制服がお気に召さなかったらしい。

「どんな服装がいいのかわからなかったので制服にしました」

「ちょっとこっちに來い」

百目鬼は振り返って歩き出した。俺もその背中を追って歩き出す。百目鬼が連れてきたのはパーティー会場の裏手にある控室だった。「これを着ろ」

百目鬼が差し出したのは黒いスーツだった。

「まさかスペア？」

毎日のように黒いスーツを着てる百目鬼のことだ。スペアの一つや二つ持ってたところで驚きはしない。

「違う。このホテルの貸衣装だ。パーティーだというのに一人だけ制服では目立つだろ」

「どうしても着ないとダメか？」

スーツなんて俺には似合わないし、今更着替えるのも恥しい。できるなら最後まで制服いさせてほしい。

「ダメだ。親睦会の参加条件にもできるだけ礼服でと書かれてあっただろ」

確かに後で受け取った親睦会のしおりには書いてあった。だから俺は時和にドレスっぽい服装でと忠告したんだ。

「いやでも制服は冠婚葬祭に着ていけるだろ」

「これではどっちが教育者で生徒かわからないな。普通、こういう時生徒は制服を嫌がるものじゃないのか？」

「どうでしょうね。俺は普通の生徒じゃないんでわかりません」

冷血漢だからな。

「とりあえず着ろ。もうホテル側から借りてしまったし、それに天音の隣にいる者として服装はちゃんとしてもらいたい」

珍しく百目鬼が俺に優しいと思ったたらそういうことか。天音のこたになるこの鬼は親バカっぽいな。

渋々スーツを受け取る。

「制服のYシャツの上から着ればいいのか？」

「ダメだ。全部着ろ」

厳しい。

制服からスーツに着替える。なんだか着慣れてないせいか、落ち着かない。

本当にこれで合ってるのか？

「よし、次行くぞ」

と言つて百目鬼は控室から出て行く。

「え、おい。まだ何処かに行くのか」

その後を急いで追う。

「今度は近くにある美容室だ。そのボサボサの髪を整えるぞ」

「はあ！ そんなことまでするのか！ 時間がないだろ！」

千円分料理を食べないといけないんだ。

「黙って付いて来い。もう予約してしまった。それに時間のことは心配するな。店にも事情を話してあるから、十分で終わらせてくれるぞうだ」

そういう手回しだけは本当に早い。

結局、パーティー会場に戻つてこれたのは百目鬼につれられて十五分後。しかし、格好は十五分前とはぜんぜん違う。制服は黒いスーツに変わり、ボサボサだった髪は綺麗に整えられている。

元の場所に行くとまだ篠崎がいた。

「まったく酷い目にあつた」

と声を掛けるとなぜか篠崎は呆然と俺を見つめる。

「えっと、五月女か？」

何言つてんだコイツ？

「それ以外に誰に見えんだ」

「マジで五月女か！」

目を見開いて驚かれた。

そんなに変わったか？

「いやスゲーエーな。ここまで変わるもんなんだな。髪も切ってるよな？」

「ああ、理事長に連れ回された」

「スゲーエスゲー。まるで違うわ。田舎の不良がイカすヤクザにクラ

スチエンジンして帰ってきたよ」

それは褒めてるのか、貶してるのか？

「理事長もスゲーな。短時間でここまでするなんて。うん？ でもなんでだ？」

時和のためとは言えず、「さあな」と返した。

「おい、大樹」

それから篠崎と料理を食べているとなんとも元気潑刺とした声が聞こえてくる。

「おい、飛鳥」

声と共に女子が一人こつちに来た。そして篠崎と話したず。

「この後のビンゴ大会なんだけどさ。司会の子が病欠しちゃってさあ。大樹司会やってくれない？」

「俺が？ でもビンゴの時、俺番号書きだしていく役だぜ」

「そつちは私がやるよ。司会誰もやりたがらなくて、私がやつてもいいけど、ルール説明私だしさ。大樹しか頼める相手いないの。お願い」

と女子は頭を下げ、両手を合わせた。

「わかった。司会進行の内容わかるか」

「それはもちろん。紙に書いてきたよ」

ほら、と言つて篠崎に手渡そうとしたところで、その先にいる俺と目が合った。

「ほう。学校では見たことない顔だね。何組？」

目線で俺に言つてるとわかる。

「三組だ」

「三組？ おつかしいな。何回か行ったことがあるからこんな上玉見逃したってことはないはずなんだけど……」

と腕組みして考えだした。

その横では篠崎が口を抑えて笑っている。

「飛鳥、ソイツ五月女だよ」

「え！ 五月女ってあの五月女縁！」

俺ってそんなに有名なのか？

「嘘！　だって五月女くんって言ったら長い前髪の間から目を光らせて、人に対しては絶対優しさを見せないって噂の冷血漢。それがこの人？」

そんな尾鰭まで付いてたのか。

疑いの目でまじまじと見てくる。うつとうしい。

「イメチェンした？」

「してない」

「今さっきな」

俺と篠崎の声が被る。

「おい篠崎、余計なこと言うな」

「事実だろ」

「理事長が勝手にしたことだ」

「はいはい、ケンカしちゃダメだよ。まだ私と五月女くん、お互いに自己紹介もしてないんだから。ケンカならその後して」

女子が俺と篠崎との間に右手を入れて割って入る。

「ケンカじゃねえーよ。俺たちはいつもこんなもんなの」

「はいはい、わかった。」

えっと、五月女くんがいいよね。私は六組の高根沢飛鳥。この親睦会の役員やつてるんだ。そこにいる大樹とは中学からの腐れ縁」と篠崎を親指で指差す。そういえば篠崎の名前は大樹だったな。

今まで忘れてたけど。

六組ってことは時和と同じクラスだ。俺は見たことないが時和は面識があるな。

「俺の自己紹介は必要か？」

「大丈夫。五月女くんの噂はいろいろ耳に入ってくるから」

ほぼ全部が良い噂じゃないのは確かだ。

「でも思ってたより悪そうな人じゃないね。見た目が変わったから？」

「五月女はこう見えても結構いい奴だぜ。ただかなり無愛想で、人

に無関心なだけで。話してみると結構面白いところもある」

「へえ、大樹が言うなら本当なんだろうね」

「ああ、いつも噂と本性のギャップに笑わせてもらってるよ」

「そういえば篠崎と喋っていると偶に笑いを堪えてる時がある。たぶんあの時ギャップとやらを見つけたんだろう。」

「うーん。じゃあ噂が全部ホントってわけじゃないんだね」

「いや、殆どガセだぜ」

「話し掛けてきた女子を睨みつけて追い返したっていうのは？」

「おい、そんなことした覚えはないぞ！」

「それは五月女が寝起きで目が細かったから女子の方が勘違いしたんだろ」

「なんでお前が知ってたんだよ」

「隣で見てたから」

見てたなら教える。

「じゃあ、体育教師の顔を殴ったってのは？」

「……それ、もう謹慎レベルだろ。謹慎になってない時点で嘘だつて気付けよ」

「ハンドボールの授業中、五月女の投げたボールが当たったんだよ。ああ、そんなこともあった。相手のチームの人数が足りなくて教師が混ざってんだっけ。確かゴールキーパーやってたな。」

「そこまで確認したところで高根沢はつまらなそうに口を尖らせる。」

「なんだ殆ど嘘なのか。期待外れだな」

「期待外れとまで言うか。そこまで言われると俺がつまらない人間みたいだ。」

「じゃあこれも嘘なのか。時和さんと付き合ってるって」

「そう聞こえた時、瞬時に篠崎が俺の方を向いた。目付きがまるで悪戯をする前の子どものようだ。いや、実際そうなんだろう。」

「その噂はどうなんだろうな、五月女」

意味深な言い方で話題を振ってくる。

それで高根沢も感付いたのか、「ほほお」と俺に近づいてくる。

この二人気が合わなそう。で実は合うんじゃないか。噂好きってところで。

「五月女くん何か隠してるんだ」

「隠してない。俺と時和はそんな関係じゃねえ」

「でも火がないところに煙は立たないって言うし、何かあるんですよ」

じりじりと詰め寄って来る。まるで獲物を狙う獅子だ。そして獅子は間合に獲物が入るとバツと襲いかかってきた。

「なっ！」

実際は腕に抱きつかれた。

「ほらほらお姉さんに教えてごらん」

「お姉さんって歳一緒だろ！」

振り解こうとするが、がっしり両手で巻きついて離れない。逆にもがくと離れまいとして更に強く巻きつく。

腕に何か柔らかいものが当たる。

コイツ狙ってやってる。目がそう言ってる。

「こんなにサービスしてるのにダメ？」

終いには上目遣いで不安そうな顔して言う。

助けを求めて篠崎に視線を送るが、こっちを見て呑気に笑ってる。助ける気はないらしい。

ここで頷いたら俺がコイツに負けてみたいで嫌だ。どうにかならぬいかと考えていると、後ろから声が掛かった。

「縁くんから離れなさい！」

振り向くとそこには時和が仁王立ちしていた。

あれ、なんか怒ってる？

「お！ もう一人の当事者登場」

それとは逆に高根沢は嬉しそうだ。

「高根沢さんどうして縁くんを抱きついてるの！」

「な・い・しょ」

更に怒りが増した気がする。

後ろにある異様なオーラは俺だけに見えるのか？ この目をもつて
るから見えているのか？

「そういうことを人前でするのは不謹慎だと思うわ」

「けど五月女くんは喜んでるよ？」

「俺がいつ喜んだ！」

思わず怒鳴ってしまった。

すると高根沢は今にも泣きそうな顔をして上目遣いで見つめてくる。

「五月女くんどうしてそんなこと言うの。さっきはあんなに私のこと口説いてくれたのに……」

爆弾を放り込みやがった。

時和は顔を耳まで真っ赤にさせてぶるぶると震えている。
なんでお前が赤くなってるんだ。

「え、縁くんは私は口説かないのに高根沢さんは口説くのね！」

爆弾を放り込み返しやがった。

次第に会場の生徒たちの視線が集まってきてるのがわかる。
そろそろ悪ふざけも潮時だ。

「おい高根沢、頼むからあんまり時和を刺激するな」

注意すると「しょうがないな」と言っですんなりと離れた。

「時和もこれは高根沢の冗談だ。本気にするな」

「え、冗談？」

「そ、時和さんと五月女くんの関係が知りたくてね。悪ふざけが過ぎたよ。ごめん」

とあっけらかんに謝るので時和も「そ、そうだったの」と苦笑い。

「でも予想以上に二人は愛し合ってるんだね」

「げほおっげほおっ」

飲んだジュースを思いつきり気管入れてしまった。

「どうしてそうなる！」

「だって時和さんはかなり嫉妬してたし、五月女くんも時和さんに悲しい思いをさせたくないから止めたんでしょ」

「どうしてそうなる。俺は視線が気になったから注意しただけだ」
「わ、私はただ不謹慎だから中止しただけで、そういう意味じゃないわ」

俺と時和の声が被る。

「うん、息もピッタリ」

これは何を言っても無駄だな。

新しいジュースを取りにいったん離れる。

「どうだった、飛鳥の感触は？」

ニヤニヤしながら篠崎が聞いてきた。

「うるさい、裏切者。なんで助けにこないんだ」

「いやいやあそこに割って入るのは無理だろ。とてもそんな雰囲気じゃなかったから」

役立たずめ、と心の中で悪態を吐く。

「でも決まりだな。時和さん完全にお前に惚れてるよ」

「ブー——」

この度は飲んでいるジュースを吹き出してしまった。

「うわぁ、汚な！ なに吹き出してんだよ」

「お前がいきなり変なことを言い出すからだろ！」

慌ててテーブルにあったナプキンで床を拭く。

「いきなりって。お前さっきの時和さん見ただろ。あれは完全な嫉妬だ」

「そうだな、嫉妬だ」

「それってつまりお前のことを好きだからだろ」

「それは違う」

「はぁ？」

篠崎が納得してなさそうな顔をする。

だけど時和は俺に恋愛感情なんて抱いてない。なんていったってアイツは神様だ。人間の俺なんかをそんな風に見ているわけない。あの時は唯一の理解者を取られたとも思ってたんだろ。

「まあそういうわけだ。時和は俺のことなんて眼中にないよ。なん

せ時和だぞ。もつと他にいい奴がいるだろ」

そこまで言うとき篠崎も「それもそうだけど」とまだ納得してない様子だ。

篠崎と時和たちの方へ戻ると、二人はまだ何か話していた。

なぜか時和は顔を真っ赤にして。

「いや、それにしても時和さんがこんなに話しやすい人だとは思わなかったよ」

ジュースを飲みながら高根沢が呟いた。

その言葉に俺は声にこそ出さなかったものの「おお！」と心の中で叫んだ。

これはいい流れだ。

「そ、そうかしら？」

「うん、なんか新たな一面を見た感じだよ」

高根沢の何気ない一言。けどそれは確実に時和の中で大きなものとなった。希望と言ったら大げさだが、もしかしたらという気持ちを持たせてくる。

時和もそれを感じたのか、嬉しそうに高根沢と喋る。

しかし次に高根沢が言った一言がとんでもない波乱を起こす。

「だってこの企画があるのに参加してくれるとは思わなかった」

と高根沢が新鮮を向けた先には役員っぽい男子が立っていた。

「それではメインイベント。親睦会限定プチミスコンを始めたいと思います」

マイクを片手に高らかに宣言すると、会場は異様な歓声が上がった。

「み、みすこん？」

時和が首を傾げる。

俺は頭を抱える。

「おい篠崎。こんなミスコンがあるなんて聞いてないぞ」

「あれ？ しおりに乗ってなかったっけ？」

俺はポケットにしまい込んだしおりを広げ、プログラムを確認す

る。

「乗ってねえぞ！」

「あつれー、おかしいな。印刷ミスかー（棒読み）」

ワザとか。これのために俺を使つて時和を呼び出したのか。

篠崎を睨んでいると時和が話しかけてくる。

「縁くん、ミスコンってなにかしら？」

説明しようとする篠崎が横から割つて出た。

「え、時和さんミスコン知らないの？」

篠崎の勢いに押されて、引き気味に頷く。

「ミスコンっていうのは一番綺麗な女の子を決める大会だよ。今回は会場にいる男子が誰がいいか投票するんだ」

「それって私も出るの？」

「出たい人だけが出来れば時和さんは出てほしいな」

「そう……」

時和が複雑そうな顔をする。

これは時和を誘つた俺の責任だ。篠崎が何か企んでいることぐらいちゃんと気付くべきだった。

罪悪感が肩に重く押し掛かる。

「時和は出たくないなら出なくてもいいだぞ」

助け舟を出すも時和は首を横に振った。

「大丈夫。こういうイベントには出ておきたいし、それに……」

言葉を止めて、俺をジツと見つめる。

なんだ？

「それでは女子のみなさんはステージ前に集まってください」

司会から呼び出しがかかる。時和は続きを言うことなく、ステージ前へと向かつてしまった。

「やっぱり五月女に頼んで正解だったな」

「なにを？」

「時和さんを誘うのだよ。他の奴なら来なかっただろうし、来たとしてもミスコンには出てくれなかっただろうな」

「まるで俺がいたからミスコンに出たみたいない方だな」

「実際そうだ。見ただろステージに行く前の時和さん。どう見ても五月女が誰に投票するか気になってた顔だぜ」

あー羨ましい、と投げやりに言う。

何を言い返す気が起きなかった俺は黙ってステージを見つめる。

参加者たちはすでにステージに上り、その左側に時和はいた。その胸には四と書かれた札が付けられている。

そして会場にいる奴らにも何か紙とペンが手渡される。そこには一から八までの番号が書かれていた。

要するに気に入った人の番号に丸を付ければいいのか。

「で、どうするんだ。もちろん時和さんに入れるんだろ」

ニヤケた顔で篠崎が訊いてきた。

「まさか、俺が入れなくてもアイツは勝つだろ」

「勝ち負けの問題じゃない。時和さんはお前が入れてくれるのを望んでるんだぞ。入れるのが男つてもんだろ」

またその話か。コイツも好きだな。

「はいはい、勝手に言ってる」

軽く受け流す。

ミスコンというから何をするのかと思ったら、自己紹介と質問をして終わりだった。

篠崎曰く「水着審査までしたかったけど流石に無理」

まあここで水着になれと言われてなれる奴はいないだろ。そこまですいたら本当のミスコンだ。高校生にはレベルが高い。

ミスコンは順調に進みついに時和の順番となった。マイクを司会から受けとる。

「では、四番の方、自己紹介をお願いします」

そう告げられるとビクツと肩を揺らした。

かなり緊張してるな。

「は、はひ！」

あ、噛んだ。

会場から笑いが起きる。時和は顔を真っ赤にしている。

「ろ、六組の時和天音です」

「それでは時和さんに質問していきたいと思います。好きな食べ物は？」

「えっと、甘味だったら何でも好きです」

パフェをあれだけ食べられるんだからな。

「じゃあ逆に嫌いな食べ物？」

「食べ物ではないんですけど、炭酸飲料が苦手です」

たぶん俺のメロンソーダが原因だな。

「炭酸飲料？」

「はい、あのピリピリした感じが苦手です」

「そうなんですか。では住んでるところは何処ですか？」

「えっと、時和湖の近くです」

流石に時和湖に住んでいるとは言えなかったようだ。

「ほう、苗字も同じ名前ですが、もしかして何か関係があるんですか？」

「はい。詳しいことは知らないんですが、そうらしいです」

時和って意外と嘘が上手いな。

「なるほど。では、次の質問」

と司会はどんどん質問を投げかけ、時和もそれに答えていく。

五つ目の質問が終わると司会は「最後の質問です」と告げる。

「ずばり彼氏はいますか」

会場がざわめき出す。九割の視線は時和に向けられ、残り一割は

噂のお陰で俺に向けられていた。

「彼氏ってなんですか？」

会場の全員が心の中でこけた音がした。

「えっと、お付き合いしてる人です」

「お付き合いですか……」

時和はマイクを握り締めたまま、それ以上何も言わない。やがて顔を俯けて、傍から見れば辛そうだ。

そして沈黙が長くなると、司会が場の空気を察してか時和に声を掛ける。

「えっと時和さん、答えたくないなら無理して答えなくていいですよ……」

反応はない。俯いたままだと思った瞬間、時和は顔を上げた。

会場を見渡して、俺と目が合うとそこで目線を止めた。

時間にして三秒。時和と俺は見つめ合った。

やがて時和の方から視線を外し、マイクを少し上げる。

「そういう方はいませんが、結婚を約束した人はいます」

会場から音が消えた。会場にいた全員が時和の言葉に驚き啞然としている。

物音しない会場でいち早く我に返ったのは司会だった。

「え、えっとこれは意外な回答ですね。それはつまり許嫁というやつですか？」

「いえ、お互いに口約束しただけです」

その受け答えをきっかけに会場に音が戻る。静かだった時間を取り戻そうと一気に会場中が話声で満たさせる。

だが俺だけはまだ放心状態だった。

最初は冗談じゃないかと思ったが、あの時和の顔はそんなことを言ってる風には見えなかった。本当結婚を約束した相手がいるんだ。時和にそんな奴がいたことを知らなかった。百目鬼の顔が浮かんだが、アイツはどちらかというと親の立場だ。間違っても時和とそういう関係になることはない。

じゃあ、誰だ。

やっぱり神様だから神様同士と結婚するのか。それともあの宴会の中にいた妖怪の誰かか。いや、時和はそういう方がいないと言った。つまり近くにいないってことじゃないか。遠くにいてあまり会えないってことだ。

「おい、五月女！」

急に肩を掴まれ、我に返った。横を見ると篠崎が深刻そうな顔で

俺を見ていた。

「どうしたんだ。さつきから呼んでも返事しないし、顔も真っ青だぞ」

「ぜんぜん気付かなかった。」

ステージを見るとすでに時和たちはいなくなっている。

「ほら、もう全員の紹介終わってるぞ。投票用紙さつさと書きちまえよ」

促されて投票用紙を見る。そこにはもちろん時和の四番も含まれている。

時和のあの発言を聞くまではこの四番に丸を付けようと思っていた。それ以外の女子とは話したこともないし、それが無難だと考えて。だけど今の俺にはそんな気が起きない。なぜか、ちゃんと顔も見たことない六に丸を付けて役員の持ってきた投票箱に入れた。

結界は当然時和が一位だった。しかし、思ってたより票が割れた。俺と同じようにあの発言で変えたやつがいるんだう。

最後のイベントであるミスコンが終わると、閉会式を挟んで親睦会は終了となった。それまで時和と話す機会はなく、帰り道でミスコン後初めて二人きりとなった。

「今日は楽しかったわ」

辺りは真っ暗になり街灯のない道で時和が口を開いた。

「千円払ったんだから楽しんでもらわないと困るけどな」

「それには感謝してるわ。ありがと、縁くん」

そう面と向かって言われると恥ずかしいものがある。

「でも、縁くんも結構楽しんだわ」

「まあ千円分の料理はしっかり食べさせてもらったから、楽しんだって言うなら楽しんだな」

「そうじゃなくて高根沢さんに抱きつかれて随分と楽しそうだったわ」

コイツ、なんでか知らないが根に持ってるらしい。

「お前は何処をどう見ればそんな風に見えたんだ。どう見ても困っ

てただろ」

「困ってるなら無理やり振り解けばいいじゃない」

「女相手にそんなこと出来るわけないだろ」

「へえ」意味深な笑みを浮かべる。

嫌な予感がする、と思った時には遅かった。

時和はすでに動き出し、俺の腕に抱きついた。

「なっ！」

一瞬のことで避けることはもちろん驚いて声が出せなかった。

「本当に無理に振り解こうとしないわね」

厭味な目線を送りながらそんなことを言う。

「離れろ」

「無理に振り解けば？」

思わず舌打ちした。

「これで縁くんは私のことを異性として認識してるってわかったわ」

コイツ調子に乗りやがって本当に無理やり振り解いてやるうか。

なんて思ったが止めた。また怒らせると面倒だし、何よりコイツ

には許嫁（？）がいるらしいから、彼女が他の男にぞんざいに扱わ

れてたらいい気分がしないだろ。

いやそれは他の男に抱きついてても同じか。

「ほらそろそろ離れろ」

「嫌よ」

「お前、許嫁がいるんだろ。ソイツにやってやれ」

時和は何秒か黙って後で「そうね」と言っただけで俺の腕から離れた。

その後、時和から話しかけてくることはなかった。

俺は一度、その許嫁について訊こうとしたが止めた。なんだか訊

いていい気分にはなれなそうさ。

ぎくしゃくした関係

それ以降、時和からのあの手紙と呼ぶにはお粗末なメモが下駄箱に入っていることはなかった。前にも一度時和を怒らせてこんなことがあった。今回はまったく怒らせた覚えがない。

「そういえば最近、時和さん変わったよな」

昼休み珍しく教室で俺と一緒に昼食を食べた篠崎が呟いた。

「変わったって？」

「なんていうか話しやすくなったかな。親睦会が終わった後からよく飛鳥と遊んでるらしいんだけど。結構気さくな感じで冗談も通じるらしい」

それは変わったんじゃないかと本性が表れたただけだ。

ともあれ時和を親睦会に誘ったのは正解だったらしい。

「でも一番変わったのはお前だと俺は思っけどな」

と言って俺を指差す。

「って俺？」

「そう。入学した時は人を近づかせない雰囲気放ってたけど、今じゃあ普通に話しかけられるよ。この頃、お前の冷血漢の噂流れてこないし」

そういえばこの頃篠崎からそんな噂を聞かなくなった。

「たぶん時和さんとの噂が流れたあたりからだな。やっぱり時和さんと関わりと人生違ってくるんだろっなあ」

たぶんそうだ。時和が変わるうとしていたのを見て俺も影響されただろう。

「お前が思ってるような関わり方はしてねえ」

「またまたあゝ」

あ、でもこの頃、時和さんとの噂も聞かなくなったな」

それはそうだ。この頃碌に顔も合わせてないんだから。

「親睦会での発言が原因か。あの時和さんの許嫁。お前じゃないん

だろ」

「ああ、違うな」

「それでギクシャクしてるんだろ。五月女が一方的に無視してるじゃないだろうな」

その逆だ。

「そんなわけないだろ。それにもと俺と時和はそういう関係じゃないって何度言えばわかるんだ」

「でも、友達以上恋人未満だし。そろそろ次のステップに昇格していい頃じゃない？」

「俺に訊くな」

とそんなくだらない問答をした日の放課後、意外な訪問者が表れた。

「五月女くんいますかー」

教室に聞き覚えのある声が響く。

教室の入り口を見ると予想通り高根沢がいた。

「お、五月女くん発見！」

親睦会の時と変わらないテンションで俺のところへと来る。

「やーやー、親睦会以来だね」

「そうだな。で、なんのようだ」

素っ気なく返すと「連れないなあ」と悲しそうな顔をする。

「ちよつと五月女くんに話があつてね。ちよつと屋上まで面貸せや」となぜか不良のような文句で俺を呼び出した。

高根沢と屋上へと出る。時和に呼び出されて以来の屋上はその時と全く変わっていない。

ま、当たり前か。

高根沢は少し俺と距離を取ると振り返った。

「単刀直入に聞くよ」

バシッと俺を指差す。

「時和と何があつたの？」

「いや別に何もないけど」

「嘘だね」

バツサリと俺の言葉は切り捨てられる。

「五月女くんも感じてるでしょ。天音っちこの頃元気ないし、五月女くんの話してもなんだかはぐらかすし」

天音っち……。あだ名で呼ぶくらい親しくなったらしい。

神様相手にあだ名で呼ぶなんて、知らぬが仏とはこのことか。

「親睦会の時は五月女くんのこと話してるとなると言うかこう乙女って感じだったんだよ。それが今じゃあお通夜みたいな顔しちゃって。絶対なにかあったよ」

「そんなこと言われて本当に心当たりもなし、原因も知らないんだよ」

「そうなの。うーん、五月女くんでもないとなると私にも心当たりないな。でも絶対五月女くん関係なのは間違いないんだよな」

「どうしてそう言い切れるんだ？」

「恋に憧れる乙女の勘」

宛になるのか？

だが俺に関係しているのは確かだ。

「でも、絶対何かあるはず。天音っちと最後に会ったのはいつ？」

と高根沢による事情聴取が始った。

とりあえず親睦会での帰り道のことを話した。

すると高根沢は確信したように頷いた。

「それだね」

「今ので何かわかったのか？」

「ずばり五月女くんが素っ気なさ過ぎるのが原因だよ」

と再び俺を指差す。

「いやそれはいつものことだから」

「……自覚あったなら直そうよ」

呆れたような目で俺を見る。

「そうじゃなくて、親睦会の天音っちの爆弾発言覚えてるでしょ」

「彼氏はいないけど結婚を約束した人ならいるってやつか？」

「そうそれ。あれは天音っちが五月女くんに構ってほしかったんだよ。いつも素っ気ないからたまには心配してほしいみたい。ね！」
いや、「ね！」と言われても……。

「そんな感じじゃなかったぞ。本当にいるみたいだし。そういう人がいるから俺と距離を置こうとしてるんじゃないか？」

いや実際そうだろう。

「いや違う。あの発言は五月女くんへのメッセージだよ、ぜったい！」

また乙女の勘ってやつか。

「とにかく五月女くんできるだけ天音っちに話しかけてね。原因の方は私で探ってみるから」

「じゃあね」と言って高根沢は去って行った。

まるで嵐が過ぎ去ったあとのように屋上は静かになった。

と言われても時和と話せる機会なんてそうそうない。廊下で見かけた時は大抵誰かと一緒にいるし、こちらから呼び出して話をするってほどのことでもない。

だからそんなチャンスは当分こないな、と思っていた矢先、時和とばったり廊下で出くわした。しかもあつちは一人だ。

「よう、こんなところで何やってんだ」

この廊下は普段人通りが極端に少ない。

「縁くん。図書室行ってたの」

と言う時和の手には一冊の本がある。

なるほど確かにこの廊下は図書室に行くのに一番近い。

「そうか、じゃあまたな」

「うん」

とお互いに別れた。

ほんの二十秒ほどの会話だが特に変わった様子はなかった。そのことを高根沢に伝えると、

「はあ？ 五月女くんってバカ？」

軽蔑するかのような目で罵倒された。

俺と高根沢は再び屋上で話しあっていた。どうも何か情報を仕入れたらしい。

「女の子舐めてるでしょ。そんな二十秒程度話ただけで相手に気持ちを知られるような子はいないわよ。五月女くんってあんまし女の子と喋ったことないでしょ。やっぱりこんな鈍感で素っ気ない男に捕まったことが運のつきだったのかな」

酷い言われようだった。

「それは俺が悪かった。それで高根沢の情報ってなんだ？」

「うん？ いやこれは関係あるのかわからないんだけど。」

天音っちって時和湖の辺りに住んでんだよね？」

「そう言ってたな」

実際は時和湖“に”だが。

「実は今、時和湖を埋めて、そこに私営プールを作るって計画があるらしいの」

「なに？ それっていつの話だ」

「一年前辺りから計画されてたらしいんだけど、公になったのは昨日。急ピッチで作業を進めて今年の夏にオープンするって。もしかしたらそれで天音っちの家も移動しなくちゃいけなくて、それで元気がないのになって」

いや元気とかの問題じゃない。時和は自分を時和湖の九十九神だと言っていた。それはつまり時和は時和湖であって、時和湖は時和というわけだ。その自分の分身と言える時和湖が埋められ、実質的になくなるんだ。元気がなくなるとかじゃなくてももしかしたら時和湖と一緒に消えることになるんじゃない。

考えれば考えるほど最悪の事態しか思いつかない。

「どうしたの五月女くん。顔が真っ青だけど」

高根沢の声でハツとなる。

ここで考えても仕方ない。しってそうなやつに訊かないと。

「悪い高根沢。俺急用思い出した！」

と言って屋上から出て行く。

本人に訊くのはダメだ。時和は人に心配を掛けることを嫌ってる。最悪嘘を吐く可能性もある。

となると一人しかない。

「百目鬼いるか！」

理事長室に入るなり叫ぶ。そこには百目鬼と教頭がいた。

「君、理事長を呼び捨てとは何事だ！」

最初に口を開いたのは教徒だった。随分とご立腹のようで、怒声を上げている。

だが、今はそんなことに付き合ってる時間はない。教頭を無視して百目鬼に駆けよる。

「百目鬼、時和湖がなくなるってのは本当か！」

それを聞いた瞬間、百目鬼の無表情が崩れた。

「すいません、教頭。少しの時間でいいので席を外してもらえないでしょうか？」

「え、しかし……」

教頭は俺をチラッと見て、「わかりました」と言って理事長室から出て行った。

「それでその話を何処から聞いた？」

「友達からだ」

「……そうか」

百目鬼は立ち上がり、コーヒースバーに手を付けた。

「本当なのか？」

「事実だ。今年の初夏には時和湖はなくなる」

初夏。つまり後一カ月後ぐらいには時和湖は埋まってるってことか。

「おい大丈夫なのか！ 時和は時和湖自身なんだから！ なら時和湖がなくなったら、時和も消えるんじゃないか」

「少し落ち着け」と百目鬼がコーヒを俺に手渡す。

俺は息を履いて、一口飲んだ。

「それでどうなんだ」

「お前が言った通り確かにここままだと天音は消える。だが手がないわけではない」

俺が言い返す前に百目鬼は言い張った。

「確かに天音と時和湖は同じ存在だが、各々がちゃんとした存在を持っている。天音は神様としての体を持って存在し、時和湖は湖を持って存在している。矛盾してるようだが、同じであるが一緒じゃないんだ」

「そこに付けいる隙がある」と百目鬼は続ける。

「時和を別の土地に移住させて、その土地神にする」

「そんなこと出来るのか」

「不可能じゃない。だが、その土地に慣れるまでそこから出られないというリスクもある。最低でも三年、相性が悪いと一生というところもありうる」

「一生……」

それはキツイ。

だけど消えるよりはマシだ。

「それで何処にするかは決めたのか」

「いや、それは……まだだ」

百目鬼が言いづらそうに答える。

「そんなんで間に合うのか」

「それは大丈夫だ。いくつか候補はある。あとは時和が選ぶのを待つだけだ」

「そ、そうか」

安心したと思ったらどつと疲れが押し寄せてきた。ソファに倒れるようにして座り込んだ。

「そんなに時和が心配だったのか」

そう言われて初めて自分からしくもないことをしてるのに気づいた。

「いや、別にそういうわけじゃあ……ただ知り合いがいなくなるのが嫌だったただけだ」

「そうか」と言つて百目鬼は珍しく笑つていた。

理事長室を出る時、教頭とすれ違つと一瞬睨まれた。まああんだけのことをしたんだからどうせんだらう。

明日はたぶん呼び出される。そしたらまた変な噂がたつだらう。

帰り道、時和湖によつてみた時和はいなかったが、その代わり時和湖の前に看板が建つていた。

『時和市民プール建設予定地』と書かれている。

今日の朝にはこんな看板は建つてなかった。仕事が早いことだ。

もし百目鬼に会わずにこれを見ていたら慌てふためいたことだらう。だが、今は時和湖がなくなるちよつとした寂しさがあるくらいだ。やっぱり今まで通学で見てきただけあつて、普通の人よりは愛着があるし、時和と関わつてからは足を運ぶことが多かった。けどまあそれは仕方ない。

そんな風に割り切つて時和湖を離れた。

しかしその後、工事が始つて二日目に時和は事業中に突然倒れたと知らせが来た。

時和湖の危機は天音の危機

「どういうことだ」

高根沢から知らせを受けて俺は保健室へと着ていた。そこにはベツドで寝ている時和と百目鬼がいる。保険医の先生や一緒に来た高根沢は百目鬼の一言で退室してもらった。

「……………」

百目鬼は答えない。目を瞑って黙って腕を組んでいる。

それが俺の冷静さを欠いた。百目鬼の胸倉を掴み上げ、無理やりこちらを向かせる。

「百目鬼、お前は俺に言った。後は時和が場所を選ぶだけだって。それなのになんで時和が倒れた。お前の言葉は嘘だったのか！」

胸倉を掴む手に力が入る。

「……………」

それでも百目鬼は何も言わず、ただジッと俺を見つめる。

「なんとか言え！ 百目鬼！」

「縁くん、ここは保健室なんだから静かにしなさい」

声に振り向くとそこには起き上がった時和がいた。

「時和……………」

百目鬼から手を離して、時和を見つめる。その顔は血が通ってないじゃないかと思うほど蒼白だ。

「時和、教える。なんで倒れた。お前は別の場所で土地神になるはずじゃないのか？」

俺の質問に時和は力なく笑う。

「百目鬼はまた話したのね。まったく口が軽いんだから」

「今はそんなことどうでもいい。どうしてお前はまたそんな弱り切ってるんだ！」

時和は俺の顔をジッと見る。

その目には光がない。まるでこの世に希望がないみたいだ。正直

言って死んだ魚の目だ。

なんでだ。なんで俺を見てそんな目をする。

「私は他の場所の土地神になる気はないわ」

時和は自分の口でそう言った。

「……な、なに言ってるんだ。お前、このままだと消えるんだぞ。死ぬんだぞ。それでいいっていうのか！」

時和は頷く。

「意味がわからない。どうして消えるってわかっててそんなことが出来るんだ」

「私は生まれた時から時和湖なの。今更、時和湖と離れるつもりはないわ」

「その時和湖はなくなるんだよ！ わかってんのか！」

「私は時和湖。時和湖の九十九神よ。時和湖が消える時が私の消える時なの」

これが人間と神様の違いなのか。

俺は人間だから時和の気持ち理解できないのか。

だけど、たとえ時和の気持ちがあったとしてもそれだけはわからない。わかりたくない。

「わからない……俺にはお前の言ってることがぜんぜんわからない」

「わからなくてもいいわ。でも、これだけは理解して今の縁くんに何を言われても私は時和湖から離れる気はないわ」

時和の言葉が心に突き刺さった。まるで時和が俺を崖から突き落とすとしたようだ。

今まで味わったことのない絶望感と喪失感が俺を襲う。

「そうかよ、わかった。もう俺は何も言わない」

俺は保健室から出た。

その後俺は授業を受ける気にもなれず、無断で早退した。

家に帰るとじいちゃんに調子が悪いと言って自室で横になった。

だが眠れるはずもなく、頭の中にはずっと時和のことがぐるぐると駆け廻る。

あれだけ突き離れたのにまだ俺は懲りてないようだ。

考えるな、と頭の中で連呼する。これ以上考えたって俺にしてやれることはない。だから考えるな。

だけどそう思えば思っただけ、まるで底なし沼に嵌ったように抜け出せなくなる。

そんなことを繰り返すうちに時は過ぎて、外はすっかり日が沈んでいた。

「おい、縁。飯作ってくれ」

扉を隔ててじいちゃんの声が聞こえる。時計を見れば七時過ぎていた。

「わかった。ちょっと待ってて」

そう言って起き上がって部屋から出る。

縁側に出ると、外が一望できる。流石に時和湖は見えないが、工事の音はここからよく聞こえるのだ。

だが、もう音は聞こえず、虫の鳴く音だけが響き渡る。

「じいちゃん、悪いけど飯は納豆だけで食べてくれ」

茶の間に向かって告げるとしばらくして「仕方ないのう」と返事がくる。

俺は玄関で靴を履いて、外に出た。

目指してるのはもちろん時和湖。

自分のバカさ加減が嫌になる。あれだけ自分に言い聞かせたのに結局これか、と。だけど、工事の進行状況を見れば時和があとどれくらい持つのかわかるかもしれない。もし、もう残り少ないならせめて時和が望んでることを……。

曲がり角を曲がる。ここまでくれば後は一本道というところで、道の先に人が倒れているのが見える。

「まさか！」

それに向かって駆けだす。そしてそこにいたのは案の定時和だった。

「おい時和！」

抱きかかえて呼びかけると時和はうつすらと目を開ける。

「縁くん……」

弱々しい声で俺を呼ぶ。かなり衰弱してる。

そのまま時和を持ち上げて家へと目指す。家に行っただって時和の調子が戻るわけじゃない。でも、屋根がない場所で寝るよりはましだと思った。

家に着くと急いで自室に寝かせた。さっきまで寝ていたから蒲団が出しっぱなしで都合が良かったのだ。

「おい、縁。騒々しいぞ」

じいちゃんが部屋に入ってくる。

そして時和を見て、目を鋭くさせる。

「じいちゃん、頼む。黙ってコイツを家に置いてくれないか」
頭を下げてお願いする。

普通なら救急車を呼ぶべきなんだろうけど時和に人間の治療で治るわけがない。せめて時和湖に近いこの家に置いてやりたいんだ。

「その子、飯は食ったのか？」

それがじいちゃんの答えだった。

「わからないけど、目覚めたら訊いてみる」

「連れ込んだからにはしっかり面倒みてやれ」

そう言っただけでじいちゃんは部屋から出て行った。

「……ありがとう」

俺はそう小さく呟いた。

それから三時間が経ったが、時和に変化はなかった。顔を蒼白にして穏やかに眠っている。寝息をしていなかったら死体だと間違えそうだった。

「五月女」

百目鬼が部屋の隅に表れる。

「どうしてあの状態で時和を帰らせた」

そう静かにしかし怒りを込めて言う。

「すまない。本当なら学校の保健室で眠らせようと思ったのだが、

私が目を離した隙に抜け出したらしい」

本当は言いたいことは山ほどあった。しかしこの時和の顔を見て大声で怒鳴る気にはなれない。

「時和はこれからこの家に置く」

「そうしてくれると助かる。ここは時和湖から近い」

それから会話はなくなった。微かな時和の寝息と虫の声だけが聞こえる。

黙って時和の姿を見守る。

すると時和から声が漏れた。ゆっくりと目が開き、目が合う。

「縁くん、ここは……」

「俺の部屋だ。お前が倒れてたからここまで連れてきた」

「そう、縁くんの……」

時和は首だけを動かして部屋を見回す。

「なんにもないわ……男の子の部屋はもっと散らかってるものだと思うってた」

「悪かったな。何もなくて」

他愛無い会話。だがそれをするのさえも時和には辛そうだ。

「なあ、時和。教えてくれないか、どうしても他の場所の土地神になる気はないのか」

「そう言つと時和はゆっくり頷いた。」

「……うん、ない」

二度目の否定。

「そんなに時和湖と一緒に消えるのが大事か？」

「違うわ。時和湖が消えるから私も消えるの……」

止めよう。これだと保健室と同じだ。これ以上時和を喋らせるのはよくない。

「お前の考えはわかった。とりあえず今は寝ろ。疲れただろ」

「ええ、そうさせてもらうわ」

「そう言つて時和は再び目を閉じた。」

その日、俺は一睡もせず時和を見続けた。昨日の夜はずっとど

うしたら時和の考えを変えられるか考えていたのだ。

そこには百目鬼もいたが、朝になるといつの間にかいなくなっていた。

洗面台の鏡で顔を確認すると目の下に酷いクマが出来ていた。しかしそのお陰で一つの方法が思いついた。

この世に時和が残りたいと思えば考えを変えてくれるんじゃないか、と考えた。そしてその手段も考えてある。

早朝、すぐさまコンビニによってマジックと色紙を買った。この色紙に今まで時和と関わって来た人全員のメッセージを入れてもらおうと考えたのだ。正直言っただだの悪足掻きにしかないかもしれない。だが、やってみないよりはマシだ。

まず向かったのは学校すでにみんな登校している時間だ。これなら全員分書いてもらえる。まず向かったのは俺のクラスである三組。そこには既に篠崎の姿があった。

「篠崎！」

叫ぶようにして俺が呼ぶと、肩を揺らせてびっくりした。

「なんだよ、五月女。びっくりしたな。ていうかお前昨日どうしたんだ。途中から学校抜け出して」

「これ書いてくれ」

と色紙を取り出して、事情を説明した。

と言っても殆どは嘘だ。

昨日時和が倒れた後、百目鬼と一緒に病院にいったがその結果が悪くて手術をすることになった。けど時和は手術を怖がっているから勇気づけたい。みたいな感じた。

だけどこれだけだと信憑性に欠けるので「理事長に聞けばわかる」だの、殆ど百目鬼を出しに使った

それを訊くと篠崎は信じられないような顔をする。

「昨日倒れたって聞いたけどそんなに酷かったのか……」

「アイツのために頼む」

「わかった。おい、この中にも時和さんと関わった奴いるだろ。書

いてくれ」

と篠崎がクラスに呼び掛けると殆どの人が色紙に集まった。

俺はそれを啞然として見守る。こんなにも時和と関わっていたなんて知らなかった。

「おい、他のクラスにも呼びかけた方がいいじゃない？」

誰かがそんなことを言う。

「じゃあ、俺ちよつと呼び掛けてくる」

と言って一人の生徒が出て行く。

それを機にして三組に次々と生徒が集まってくる。

「おいまだか。書き終わったやつはさっさと代われ」

「おい、もう色紙にかく場所ないぜ」

「あ、私新しいノート持つてるからそこに書けばいいじゃん」

「なら早くもつてこい。朝のホームルーム始っちゃう」

おいおい、と思わず俺は呟いた。

「百目鬼、本当に俺は時和の友達作りに必要だったのか……」

俺がいなくても時和は立派に友達を作ってただろう。ただ本人が気付いてないだけで。

時和へのメッセーじ書きは昼休みまで掛かった。なぜか二年と三年の先輩まで着た時は驚いた。何処まで人脈を伸ばしたんだ。

そして色紙一枚と一冊のノートにびつちり時和へのメッセーじが書かれた。それをバツクに仕舞い、椅子から立ち上がる。

「おい、何処に行くんだ」

篠崎が昼食のパンを食べながら訊いて来い。

「時和のところだよ。この色紙とノートを見せてやるんだ」

「それならこれ使え」と言つて篠崎が何を投げる。胸の前で捕るとそれは自転車のカギ。

「お前、自転車持つてないだろ。断然そっちの方が早い」

「悪いな」

「いいよ。その代わりよろしく伝えておけ」

「わかった」と手を上げて返事をする、教室中から声を掛けられ

た。

「時和さんによろしく」

「ちゃんと渡せよ」

「しっかりね、五月女くん」

「時和さんに頑張れって伝えて」

顔すら知らない奴まで俺に話しかけてた時は驚いた。
やっぱりこれも時和の人望だろう。

縁は忘れてた

篠崎の自転車に跨って走り出す。全速力をノンストップでこぎ続ける。と、流石に体力の限界が近づいた。

時和湖が見える場所でブレーキを掛けて自転車を止める。工事の進行状況を確認して行こうと思ったのだ。忙しく働く工事現場の人たち。しかしそこになぜか時和湖が見当たらない。おかしい思っ

て辺りを見回す。
そこで気付く。木の位置や、この拓けた場所は間違いなく時和があつた場所だ。しかし、そこに時和湖はるるか水一滴すら見当たらない。

もうすでに時和湖は埋められ平地となっていた。
全身に悪寒が走る。

息もまだ整ってない体で再び自転車をこぎ出した。さっきの速度は全速力でなかったと思わせるスピードが出た。足は悲鳴をあげ、腱が切れるんじゃないかと思うほどの力で漕いだ。

家に着くと自転車から飛び降りた。靴も脱がないまま家に上がり自分の部屋の戸を開けた。

「ハアアハアア」

部屋には蒲団が引いてあり、その上にはちゃんと時和が眠っていた。
た。

疲れと安心でその場に崩れる。

「よ、良かったあ」

心の底からそう呟いた。

だが、休んでいるやけにもいかず、学校のみんなのメッセージが書かれた色紙とノートを持って時和に近づく。

そして時和に触れようとした瞬間、それに気付いた。

「……息してない」

この距離まで近づいても寝息が聞こえない。しかも胸も上下に動

いてる気配がない。

「まさか死ん——」

「まだ生きてる」

「うおお！」

急に横から声が聞こえた。驚いて後ずさりすると、そこには百目鬼が立っていた。

この一分足らずで心臓が三回も止まりそうになった。

胸を抑えて息を整える。

「生きてるって…… どういことだ」

「お前は天音が神だと忘れてないか。神が人間と同じように空気を吸わないと生きられないわけないだろ」

「いやでも昨日っていうか、朝はまだちゃんと寝息もしてただろ」

「それは天音が人間に化けてたからだ。息をしてなかったら人間に化けたとは言えないだろ。時和湖が完全に埋められて無くなった今、それを維持することも出来なくなつて神に戻つたんだ」

「ということはじいちゃんにはもう時和の姿は映ってないのか。」

「今の天音は時和湖にはない記憶。つまり人間に化けていた時の記憶と経験で存在を保っているようなものだ」

「いつまで持つんだ……」

訊きたくはなかった。だが、現状を知らないと何も始らない。

「あと一日が限界だろうな」

予想以上の短さに驚きが隠せなかった。

「……一日？ 時和には三カ月以上の人間としての記憶があるんだぞ。それが一日なんて短いはずないだろ」

「神だとしても記憶だけで存在を維持し続けることは出来ない。本当ならもう消えてもおかしくないんだ」

「なら、その前に時和を別の場所の土地神にすればいい！」

「無理だ。その場所の土地神にするには、その場所に行つて契を結ばないといけない。今の時和を運んで、契を結ばせるのは時間的に無理だ。そんな時間が何処にある。それに契は天音が意識を取り戻

さないといけない。今の天音が目覚めるとは思えない」

俺の手から色紙とノートが滑り落ちる。

「じゃあ俺のやったことは無駄だったのか……」

「今日、お前が学校でやったことは知っている。そこで学校も職員室也大騒ぎだったからな。それに関しては時和に代わって礼を言う。ありがとう」

百目鬼は正座をして俺に頭を下げた。

しかしそんな誠意も声もどうでもよかった。

ゆっくり立ち上がって部屋を出る。おぼつかない足で靴を履き、戸を開けて外に出る。特に行くあてもなくふらふらと歩いていると、時和湖が見える。いや、時和湖だった場所が見える。

工事現場の人たちは未だに作業を続けている。

コイツらは何も知らない。その行動で苦しんでいる奴がいることを何も知らない。

そう思うと無性に腹が立って、拳を握りしめていた。

「クソがあ！」

怒りを抑えきれずに近くの木を握り締めた拳で殴った。

無数の青葉が落ちてくる。

八つ当たりだとわかっている。だけど何かに当たらずにはいられなかった。

「稀有な人間だ」

「本当だ、ワシらが見える人間がいるぞ」

微かに声が聞こえた。そっちに顔を向けると、数人の妖怪たちがこっちを見て何か話していた。その中には宴会で見た顔もある。

「お前たちのせいだ！」

ある妖怪がそう言った。それを手始めとして次々と妖怪たちから罵声が飛び交う。

「そうだお前たち人間のせいで、時和様が消える！」

「無知で傲慢で身勝手な人間が！」

だんだんと罵声の勢いは増し、やがて石ころが俺に向かって投げ

られた。

その石は俺の足に当たる。

だがそれで終わることなく、どんどん石は投げつけられる。

手、足、胸、腹、いろんなところに石は当たり、ついに一つの石が俺の額に直撃した。

そこからは血が流れて俺の顔を伝い、やがて顎に溜まって、滴となって落ちた。

そうか。コイツらにしたら俺もここにいる工事現場の人たちと同じ、時和を消そうとしてる人間なんだ。さっきの自分が恥しい。まるで被害者ずらして自分を自分で痛めつけて。そうだ。俺も同じ人間なんだ。

そう思うと怒りは自然と消えて、今度は悲しくなった。悲しくて悲しくて、やがてその気持ちは涙となって頬を流れた。

「な、泣いてるのか……」

妖怪が呟くようにして言った。すると飛んでくる石が止む。

「お前も悲しいのか」

「お前も時和様がいなくなるのが辛いのか」

そうだ。

おれは悲しい。

時和が消えるのが悲しんだ。

誰かが消えるのがこんなに悲しいなんて思わなかった。

泣いて泣いて泣いて泣いて、泣けるだけ泣き尽すと、そこにはすでに妖怪たちの姿はなかった。代わりに数枚の葉っぱが置かれていた。

薬草か何かなのか。それを拾い上げて傷口に当ててみる。そうしながら家に向かうと、着くころには血は止まって痛みも引いていた。
「縁」

そして家の前にはじいちゃんが立っていた。
じいちゃんは俺の額の傷をちらりと見るが、特に何も言うわけもなく、家に入って行った。それに続いて俺も家に入り、自室へ行

こうとするが、腕を掴まれた。

「待て、その傷はおつておくと化膿するぞ」

そう言つて、じんちゃんは茶の間へと俺を連れ込む。戸棚の上にある古臭い救急箱を取り出し、脱脂綿に消毒液を垂らして、それを俺の額につけた。

「イタッ」

初毒液が傷口に染みると、反射のように言葉が出た。

「我慢しろ」とじいちゃんは言う手際よく作業していく。

大げさにガーゼを当てて医療用テープで止めた。

「これでいいじゃろ」

救急箱を片付けて、戸棚の上に戻す。

俺が茶の間から出ようとすると、じいちゃんはまた呟いた。

「あの子はどうだ。少しはよくなったか」

あの子とは時和のことだろう。今の時和はじいちゃんには見えてないはずだから、朝から俺の部屋に行つてないんだろ。

「いや、それが朝起きたらいなかったよ。たぶんよくなって自分の家に帰ったんじゃないか」

見え透いた嘘だが、誰もいない俺の部屋を見れば嫌でも納得するしかない。

「そうなのか。ワシはまたてつきり縁だけはちゃんとあの子が見えてるのかと思つたわ」

衝撃が走る。

じいちゃんはまるで俺には人に見えないものが見えてるみたいと言ひ方をする。

「じいちゃん？」

「なんだ」

「俺が、人に見えないものが見えること知つてたのか？」

恐る恐る訊いてみる。

「なんとなくじゃがな」

そう言つて頷いた。

「……そうだったのか」

思わず呟いた。

じいちゃんには俺に妖怪やアヤカシが見えることは言わなかった。いや、正確には言えなかったのだ。これを誰かに言うたびに俺は頭のおかしな奴、気味が悪い奴、構ってほしくて嘘を吐く奴として扱われていた。両親でさえ俺の言うことを信じてくれなかった。だからじいちゃんだけはそんな目で見てほしくなくて、言わなかった。「でもどうして気付いたんだ？」

「お前が五歳くらいの時だったか。一度ここに来たことがあるんだ」「え、そうだったのか」

俺にはその記憶がない。

高校入学のためにこの町に来たのが最初だと思ってた。

「そんな時のお前は意味のわからんこといってな。誰もいないところを見て「あそこに誰がいる」とか騒いで、そりやあうるさかった。ワシも最初はただの子どもの悪戯ぐらいにしか思っていなかったんだが、ある日お前が「好きな人ができた」とか言って遊びから戻ってきたことがあってな」

「俺に……好きな人？」

「それすらも覚えてないのか。」

なんでも今工事してる時和湖で会ったらしい」

時和湖。そのセリフに俺の注目がいく。

「俺、その時時和湖に行ってたのか」

「ああ、それから毎日のように行ってた。そんで帰ってくるたびに今日何やった、明日はなにやる、と騒いでな。ワシも孫の嫁になるかもしれない人だからこの目でみたくなってた。こっそりお前の後を付けてみたんだ。だけど、湖にいるのはお前一人で他には誰一人としておらんかった。なのにお前は誰かと話してるみたいに楽しそうに笑っておった。そこで気付いたんだ。縁には本当にワシには見えてないものが見えてるってな」

じいちゃんは一通り話し終わると、湯呑に入ってるお茶を啜るよ

うにして飲んで落ち着いている。

逆に俺の頭の中は混乱していた。頭に何かひっかかっているような、何か大切なことを忘れている感じがする。

五歳の時俺はここに来たことがあって、その時好きな人が出来て、その人は時和湖で出会って、それで毎日のように時和湖で遊んでた。もしかしてその好きな人って――

「そういえば天音ちゃんだったかな。昔お前が言ってた好き人の特徴に似てるのう」

その言葉で頭の引っ掛かっているものが取れた。頭を錯綜していた情報結びつき、一本の線になる。

『大人になったらアママ姉のこと絶対守るからそしたら僕と結婚して』

「……思い出した」

そうだ。俺はここに来た。その時、時和に会ってる。それで毎日のように時和湖に遊びに行ってた。

そして俺は五歳にして時和に結婚を申し込んだんだ。

「なんてことしてんだ、俺……」

昔の自分の大胆さに今更恥しくなる。

でも、これで俺は諦めるわけにはいかなかった。

遠い昔、俺もさっきまで忘れてたけど、約束したんだ。

大人になったら時和を、天音を守ると。

「ありがとう、じいちゃん」

「ワシはただ昔話をしただけだよ」と茶を啜る。

ホント持つべきものは美人の特徴を忘れないエロジジイだ。

縁の秘策

さっそ自室に戻る。

そこにはさつきと同じ位置に百目鬼が座っており、天音をジッと見つめていた。

「百目鬼」

「五月女か。どうした気持ちの整理がついたか」

「ああ、ついた。だけど諦めないっていう気持ちの整理だけだな」
百目鬼は一拍開けて口を開いた。

「まだ、何かする気なのか。止めておけ、もう救うことはできないし、天音もそれを望んでない」⁶

「そんなことは関係ない。俺はただ昔の約束を守るために時和を助けるんだ」

百目鬼が振り返る。

「五月女、覚えてたのか」

「今さつき思い出したんだよ。というか百目鬼もあの頃の俺と会ってるのか？」

俺の記憶にはないけど。

「俺が一方的に知っていただけだ。なんせ天音に纏わりつく害虫だったからな。よく観察していた」

まるで娘の彼氏を見た時の父親みたいだ。

「それはまあいい。それよりも百目鬼に」

「何をする気だ。お前にも言った通り天音を別の場所の土地神にするには時間が足りないし、契を結ぶこともできない。これ以上どうしようもない」

「そんな戯言はいい。百目鬼に二つ訊きたいことがある」

「な、なんだ」

「まずその契ってどうやるんだ」

「契はその土地の上に立って心の奥底にその土地の風景を刻み込む

んだ。その土地を己の心象風景とすれば契になる」

「つまり、時和の心の中に残せばいいってことだな」

「簡単に言えばそうなる」

「よしまず一つ目は大丈夫そうだ。」

「じゃあ次、人間が神様とその契を結べるか」

「なあっ！」

百目鬼の顔が驚愕の色に染まる。

「そんなこと出来るわけがない！」

「それは誰か試して失敗したってことか？」

「前例がないんだ。人間と契を結ぶってことは人間の九十九神になるってことだぞ。そんなの聞いたことがない」

「人間の世界だとそうでもないだろ。神様が守るのは土地だけじゃない。守り神っていう人を守ってくれる神様もいるだろ。」

「だから俺は時和を俺の守り神にする」

「そんなこと出来るわけがない」

「出来るかできないかはやってみないとわからない。百目鬼もさっき言っただろ、前例がないって。なら失敗しない可能性もあるってことだ」

百目鬼は俺をジツと見つめたまま、息を呑んだ。内心どう思っているのかは知らない。途方もないことだと呆れてるのか、くだらないことだと蔑んでいるか、もしかしたらと希望を持っているのか。

それはわからないが、これには百目鬼の力が必要だ。

「これが俺の出した時和を守るための策だ。だけどこれは仮説ではない。素人が考えた机上の空論だ。これだけじゃあ実現はおろか実証さえもできない。だから頼む。協力してくれ百目鬼」

部屋が静かになる。

やがて百目鬼が立ち上がり、俺と視線を合わせた。

「失敗したらどうなるかわからない。お前が天音の器に耐え切れずに精神が崩壊するかもしれない。それでもいいか」

「ああ、絶対失敗しないから大丈夫だ」

そう言つと百目鬼は軽く笑う。

「まるで昔のお前を見てるみたいだ。無駄に熱くて鬱陶しい奴だった」

「そうじゃないと時和を守れないからしかたない」

「よしなら、さっそく始めるぞ」

「え、もう出来るのか！」

「ああ、お前の仮説を聞けば実証する方法くらい思いつく。だが、実現させるかはお前しだいだ」

流石は理事長だ。頼もし過ぎる。

「いいか、さつきも言つたが契はその土地を己の心象風景にすることだ。この土地を人間に置き換えることは心象風景の中にその人間がいることになる。つまり天音とお前が繋がり、心象風景の中にお前を刻むことができれば、成功する。だが今の天音は意識がなくそれは不可能だ。だから逆にお前が天音の心象風景の中に入り、どうにかして天音の心象風景に自分を刻め」

「どうにかしてってどうやって」

「それはお前が考える。俺がやるのは仮説を実証に持つて行くところまでだ」

と作戦会議は終了した。

俺は天音の隣で横になり、百目鬼は俺と時和の枕元へとくる。

「俺がお前の意識を天音の心象風景の中に入れる。言わばお前と天音を繋ぐパイプだと思ってくれ」

「わかった」

そう言つと、百目鬼は俺と時和の額に人差し指と中指を当てる。

だんだんと触れてる部分がじんわりと暖かくなる。それに比例してだんだんと俺の意識が遠のく。まるで耐えられない眠気に襲われてるようだ。

「帰ってこい、五月女」

意識が途切れる前に百目鬼がそう呟いた。

次に目覚めて時、そこは何もない世界だった。見渡す限り白で埋め尽くされている。

全てが真っ白だとなんだか気持ちが悪い。何処からが天井で、何処からが壁で、何処からが床なのか、境目が分からない。自分が何処に立っているのかも曖昧だ。もしかしたら俺は寝ているんじゃないかとさえ思えてくる。無重力とはまったく違うふわふわした感じがある。

ここが時和の心象風景。心の中の世界。

本当ならここには時和湖の風景が映るはずだった。しかし時和湖が無くなった今、契を失い時和の心には何もなくなってしまったのだ。

「ここに俺を刻むのか……」

いったいどうしたらいいのかまったく見当もつかない。

とりあえず足を動かす。一步一步を慎重に踏み出して白の世界を歩く。

しかし歩いてても歩いてても白ばかり。

「白い世界には地平線もないのか……」

世界に色が一色しかなければ当たり前なのだが。

だけどこれは少しおかしい。いくら時和湖がなくなったからといって時和はまだ存在しているんだ。心象風景は心があるから生まれる。言い方を変えれば心があるが限りは存在する。なら、時和の記憶が風景となつて表れてもおかしくないんじゃないか。

それがなつてことは――

「時和自身に問題があるのか」

これも所詮素人の仮説なのだが、ないよりはマシだ。大きく息を吸い肺に空気を溜めて、叫んだ。

「時和、約束を守りに来た！」

耳を澄ませて返事を待つが、特に何も変わらない。もう一度息を吸って叫ぶ。

「時和、返事をしろ！」

再び耳を澄ませる。だが結果は変わらず、未だ世界は白いままだ。所詮は素人の考え。そう上手くはいかないか。

ダメか、と諦めかけた瞬間、少しの変化が生まれた。白い世界に風が吹いたのだ。風はだんだんと強くなり、やがて手で顔を覆わないと立っていられないほどの突風となつて俺の身に吹き付けた。

しばらくすると風は止む。

なんの嫌がらせだと思つて顔を上げると、膝を抱えて蹲る時和がいた。

「時和！」

駆けよると、時和はゆつくりと顔を上げて俺を見上げる。

「縁くん……」

声は自室で聞いた時のように弱々しい。だが、これで希望が見えた。

「時和、約束を守りに来た」

「約束……」

「ああ、俺が子どもの時にした約束だ。覚えてるだろ」

「……………」

時和は質問に答える様子はなく、光のない黒い瞳だけがじつと俺に向けられる。

そこには意思が感じられない人形のような。

どうしてそんな目をするんだ……。

どうしようもない不安が心をぎゅっと握る。

「おい、時和。しっかりしろ」

時和の肩を掴んで揺する。

だが時和は相変わらず無機質な目で俺の手を見るだけで覇気が感じられない。

「……もういいわ」

やっと口を開いて出た言葉は、心の奥底にある真つ暗なところから出てきたような一言だった。それは今の時和の瞳と同調し、さら

に不安を掻き立てる。

「何言つてんだ。このままだとお前は」

「もついいの。言つたでしょ、今の縁くんは何を言われても私は時和湖から離れる気はないって」

それは時和が俺を突き離れた言葉。

だけど、今の俺にはそんな言葉よりも大事なことがある。

「それでも、それでも俺はお前を助ける。そう約束しただろ」

それが俺の決意だ。

しかし、時和はそれを嘲笑う。

「約束……十年以上も忘れていた約束がそんなに大事？」

ぽつりと呟く。

「縁くんにとって私との約束なんてそれぐらいの意味しかなかったんでしょ。幼いことにした守れるはずもない約束ぐらいにしか思っ
てなかったんでしょ。だから十年以上も忘れていられるのよ」

時和が責めるように言う。

負い目に感じていることを、こうもはっきり言われると何も言い返すことができない。

「私は覚えてた。初めての人の友達に、初めて告白されて、とても嬉しかったわ。縁くんは幼くて頼りなかったけど、約束通りにいつか私を守ってくれる人になると思ってた。」

けど、久しぶりに会った縁くんは私のことも、約束のことも微塵も覚えてなかった……。初めて廊下ですれ違った時、すぐに縁くん
だつて気付いたわ。顔に幼さがなくなつて大人になつても、少しだけ無愛想で可愛げがなくなつても、心だけは変わってなかった。昔
のことを覚えてなくても私と遊んでくれた。だから、最初は覚えて
なくてもいいと思った。友達のままでいいと思った」

でも、と少し強い風が吹いただけでも掻き消されそうな小さな声
で言った。

「パーティーで高根沢さんに抱きつかれてる縁くんを見た時、胸が
締め付けられるように痛かった。どうしてそこにいるのが、私じゃ

ないんだろって思った。

私はぜんぜん縁くんを諦められてなかった」

だからなんだろう。時和が「彼氏はいますか？」という質問であんなことを言ったのは。

俺が思い出してくれるんじゃないかと思って、必死の願いで約束の一片を俺のいる前で言ったのだ。

だけど俺はそれを裏切った。

帰り道での俺の言葉はどれだけ時和を苦しめていたのか。それを考えると罪悪感と自己嫌悪で身が引き千切られそうになる。

「縁くん……私、もうこんな想いしたくないよう……もう辛い」

その後、俺から姿を消したのはそういう理由か……。

顔を見ると約束を思い出してしまうから、俺から距離を置いた。

「だからもういいの……こんな想いするくらいなら私は消える方がいい……」

だけど、そんな自分に後悔してる暇はない。今やるべきことは時和を助けること。悔やんだり謝ったりするのは後でもできる。

「ダメだ時和！俺は思い出した！約束を思い出したんだ！」

「そうだね……でも少し遅いよ……」

と時和が膝に顔を埋めた瞬間、時和がいる場所から黒い点が生まれる。それは世界を侵食するかのようにして、白い世界を黒いに染め上げていく。

「もう……時間切れだね……」

時間切れ。

時和の記憶が存在を保てなくなっている。

ダメだ！

そんなのダメだ！

俺は時和の腕を掴んで、無理やりに立ち上がらせた。頭一つ分くらい背の低い時和は必然的に俺を見上げる形になる。

「時和、俺は確かに今まで約束を忘れていた薄情野郎だ。お前が望むなら土下座でもなんでもするし、あのデカイパフエを自腹で奢っ

てやってもいい——でも、でもお前が消えることだけは許さない！
それに俺は約束を忘れてたけど、消してたわけじゃない。今は思
い出したし、その前も無意識で……たぶんはつきりとは言えないけ
ど覚えてたと思う」

なんとも身勝手に自分勝手な言い分だ。傍から聞いたらただの言
い訳だ。

でも、これが俺の本心だ。

「俺は学校で初めて時和とすれ違った時から気になってたんだ。屋
上に呼び出された時もお前だとわかってたから行った。宴会で誘わ
れたゲームも本当はやりたかったけど、お前とやるのが恥しくて断
った。俺と商店街に行ったのもデートっぽくて楽しみだったから逸
早く行った。公園に呼ばれた時は二人きりだと思っていったら子供
たちがいたから少し落ち込んだ。パーティーと一緒に行った時は時
和の、時和のあの着物姿を“また”見れて嬉しかった」

「そこまで思い出してたんだ……」

あの赤い牡丹の着物。あれは俺が時和に告白したときに着ていた
ものだ。

「これは勝手な解釈だけど、俺は無意識に約束を覚えてた。

——だって俺はこんなにも時和のことが好きなんだから」

たぶん今の俺の顔は耳の先まで真っ赤だろう。顔から火を出して
るんじゃないかと思うほど熱い。

幼い頃ならまだしも高校生になって異性に好きと言うのは勇気が
いるし恥しい。

「そう……ありがとう……最後にそう言ってもらただけで嬉しいわ
……」

だってのに時和は気が変わった様子はなく、未だに諦めた顔をし
ている。

思わず舌打ちをした。

くそっ！ どうしてコイツはこんなに頑固なんだ！ 普通なら今
ので終わり、ハッピーエンドなのがベタだろ！

どうやら最終手段を使うしかないみたいだ。

百目鬼に「自分を刻め」と言われたとき、俺の中では二つの方法
が思いついていた。

一つ目はさっきの『告白』。

正直これは相当嫌だった。なんで冷血漢なんて呼ばれてる俺が自
分から告白なんてしなくちゃいけないんだ、と思った。

しかし、二つ目の方がもっと嫌だったので、告白をしたのだ。

そしてその二つ目というのが――

「時和、お前は俺が約束を軽んじてるって言うなら、俺は約束の上
書きをする」

「約束の上書き？」

「ああ、今度は俺が一生忘れないくらい、五トントラックに轢かれ
て記憶喪失になっても忘れなくらいにする」

落ち着いて深呼吸する。

「俺は、五月女縁は時和天音を伴侶とし、健やかなる時も、病める
時も愛することを誓う」

「縁くん……」

うる覚えの誓いの言葉を口にして、時和の頬にそつと手を添える。
「今のうちに謝っておく、文句は戻った時に聞いてやる」

そして時和の唇に自分の唇を重ねた。

触れた瞬間体が強張ったが、すぐに体から力が抜けていく時和。
目を瞑っていたから時和がどんな顔をしていたのかはわからない。
しかし、拒絶する様子はなく、世界の全てが黒いに染まるまで俺た
ちは唇を交わし続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9100v/>

天音の世界

2011年8月31日03時34分発行